

日本書紀傳

廿九卷_七

和書
一〇五二二號

九十九

内閣文庫	
番號	和 10522
冊數	156 (108)
函號	85 1

内一六六八六號



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TMI: Kodak



教部省
文庫印

回書
清印

青政直
文庫

日本各紀傳 二十九
伊集院隆曹

斯れが祥瑞の志流斯の志驗の志流斯の皆共の同言
かりて先の慈より顯はるる者を心小識し取り義ふ
更ふり ○大己貴命以彦名命二柱神等右の如く療
病の方を以て定めさせ御在り坐けり中 大己貴命
ハハハ専内廷の事小明るく且温泉の事小委しく御
在り坐り女彦名命ハハハ病原を探る事小決めて功
しく且採薬の御事小勞らせ御在り坐けり由ふり事
の因小大己貴命の明らめさせ御在り坐て世小傳へ
させ給へり御賜物を壓イデ気天下の人小我今幸ふ可
し其ハ上二百小引注セる大同類聚方第一章小於保奈牟
知命乃美已止仁云云と有ハ病原の事ハハハ

○日本書紀傳二十九

○二百九十一

解付
知液
誤液
血有液

注さず其第二章小比登乃美乃奈連流半自免波安万
都美他麻美豆保乃計乃不多通乎加波世保豆祢奈理
知之保奈利士二奈利須知奈利保念奈利南訶咏多奈
俚典通依太奈利訶波奈利波奈利久知那利万那古
奈俚美味阿奈利加美今奈利遊毘奈利都罵念奈流
之所見尤是即近く人の身の出来始の所由を知
り遠く天地の開闢の事共を明くむ可き神語あり
由己小傳五下十二三十一小委一ノ注せるが如し偕以
比登乃美云天地の中在て天地の形象を備へ
たる物の謂ふ安万都美他麻と申すハ謂ゆる天津

中至尊の神靈小御在し坐に素より形体を成し給ハ
ず水火の気の相行はる天中小御在し坐ければ天
地の大なるより人身の小なる迄以御靈を賜りて
世小生こと爲て在る事なれば以を合せて凡其を別
ちれ小唯以一神小留申すせ給ふ御事小て以人の
託胎の初小其天津靈の寓るを云ふり美豆保乃計ハ
彼高皇産靈尊神皇産靈尊陽二柱神小て御在し坐
り其御靈を申奉るふり不多通乎加波世と云ハ右の
人体を成すと云ふ天津靈を本立にして水と火と二
の気を相交合す事を云て即謂ゆる産靈の御所業是

水の熟
せり也
の熟せ
るも
二の熟
字ハ
毎の
誤

合其委
ハ下多
蕃豆條
小因テ
説ベ

ふり如以くして以小初て成出者ハ此次小謂也
保豆神小して以神世七代章第一書小天地初判一
物在於虚中状貌難言と有る以物小して譬へて如
浮膏（印の諸書皆地物を資て成たり）混沍如鶏子（血液）云々是乃若て次小知之
保奈利士成と奈利と云ハ先小美豆保乃計ハ水氣火火氣
小して其形状を具へざるを以小至りて知之保ハ水
の熟カサせざる肉士（合）ハ火の熟（合）せざる（合）芽一章小阿萬
乃保乃計都知味豆阿治平奈伽和太仁伊連伊太須古
登乃太要邪流平都保止之底帝云々後天の養育有る
事小相心不物（不）なり以を行ハ水と味との二小十

して其味と云ふは土ありけり以り以下ハ右の水
火土の餘属ある者小して較てハ水火氣土の四あり
小具管幹の金を加へて水火氣土金の五小ふむ約也
此りけり故西蕃小てハ以資始を水火土金水と云ハ
亮土と云事人智の推量とハ云ふが我ハ古傳の趣
小ハ相叶へる者あり以處一き事ハ傳十卷二百一丁
十三卷七十二丁十五卷四十八丁十九卷九十五丁廿
一卷二十六丁等小注（合）ハ合（合）て讀て曉る可き者ハ
力然して水（合）ハ始（合）て体（合）を成して血と肉とを成
せりとハ愈具質の凝聚る小墮ハ形ハる物ハ一
小須知奈利と有る以（合）和名校小筋力（合）和名須知と有
る是乃り言義ハ進路と事小して氣血共小往來する脈

△神名小阿斯可掃
△氣道之美を
△先成也と有るを
思合す可し

を可ふり但氣ハ体無一血小乘入循不故下卷知
須地より知能美知より知美知より云ふ三小保念奈
利ハ和名抄小骨和名肉之核也と所見たる即大根の
義小一て血を小肉を小惣て相保つ柱あり二柱神祖
神ハ国中之天柱を見立させ御在し坐ける是あり三
小南訶味多奈俚ハ藏府ハ成れり不て地地下天柱の
傍小根之堅洲国有る所以以小在り味多と云ハ曲り
て互小其亮相通り膚れざる謂ふれり四小共通依太
奈剛ハ左右の手足ハ入体をも小比ふれば幹少て
手足ハ枝ふる謂ふり和名抄小肢和名衣太と見え

△同抄小肌勝知膚肉也
△倍体肌也右ハ皮也
△第巴同抄小根具小根也
△物結小根皮厚小名有
△行皮若許小根皮不
△出と有るハ皮と也
△訓ハ薄ハ徳ハ出ハ
△者ハ皮ハ小根也
△本著ハ皮ハ小根也
△小皮若許ナ
△又氣道之美を
△並たる可し
△字致て説ハ

たは是あり古事記日代宮段小小確命の大確命を泥
疑給ひし事と持捕搯批而訓其杖裏薦杖棄之見え以
雄天皇二年御紀小四支を典都能延と訓る六有り也
小訶波奈剝ハ和名抄小皮和名賀波被也被體也と有て皮
ハ被羽ハ云小似たり膚を波陀と云羽處ハ義と聞
ゆりふを思ふ小鳥の羽ふと云小覆小外小在り
謂ふりと所見たり六小波奈剝鼻久知那喇萬那古
奈理美味阿奈剝成有る鼻ハ端ハ口ハ咋道あり
眼ハ聚ハて衆物を移して識神小達す器ふ事傳十
四百五十八下小云カ如一耳ハ和名抄小耳和名美

△して以鼻口眼耳
と手足進運する旨
なり者ふ

聽^リ声^ノ者^也と有り言^ハ義^ハ聞^ルハ耳^ヲ用^ヒテ声^ノ来^ル由
あるを思^フふ^ル眼^ト同^ク聚^ルコ^ノ言^ハル^テ凡^テ
聲音^ハ外^ニ小^シ廣^クコ^ノ物^ハ多^クを聚^ルテ以^テ小^シ納^ル受^ル美^不
ウケ^リテ七^ノ小^シ加^メ美^ム々^ナ利^ハ髮^ハ毛^ヲ聚^ル多^ク事^傳十九^百
六^十下^ノ小^シ注^シ毛^ハ莖^ノ謂^ル事^傳十五^百十八^百五^十下^ノ小^シ
小^シ注^シカ^ハ如^シ是^即人^ハ毛^ヲ髮^有ハ地^ハ小^シ草^木有^ハ小^シ對^シ
者^有リハ小^シ遊^指畏^成奈^利都^亂念^成奈^流ハ右^ノ茅^四方^ヲ
四肢^ノ末^ヲ云^フ有^リ指^ニハ四肢^ニ有^テ其^ハ四肢^ノ四^ノ
力^有リ可^ク凡^ハ物^ノ行^留リ^テ受^ル事^云ル更
あり故^右ノ如^ク天津^聖と本^と為^テ水^火ノ氣^相結^ス

りて諸^器形^ノ如^ク具^リ足^ハ以^テ即^現身^ノ人^ト生^来
る物^有リけ^レバ入^ル言^ハ合^足ノ美^有ル^事已^ハ傳^ス
二十^五百^五十^五下^ノ小^シ委^リ云^フを以^テ知^ルべきあり^右ノ茅^一章^人
身^ノ出^来始^メの較^略を云^フ有^リ備^以テ天^地ハ譬^ハふ^ル
事^ハ天^地ハ出^来始^メ以^テ人^身ノ事^小合^セテ火^以違^ハ
所^無きを以^テ有^リ或^説小^古今^人身^ノ理^ヲ論^ズル^人
ハ一^箇ノ小^天地^ト云^フ由^ハ先^四肢^百骸^ハ天^地ノ成^成
一^ノ任^ハ其^任を守^リテ聊^ハ違^ハ事^無ク頭^ハ上^ニ在^在
て其^任を守^リテ下^ニ在^テ其^任を守^ル是^天地^違ハ
事^無ガ如^シ其^身を地^ハ譬^ハ云^フ時^ハ面^部を人^倫ノ
手足^ヲ禽^獸虫^魚トハ甲^毛髮^ハ非^情ノ草^木ノ如^シ
又^其身^ヲ天^地ノ形^ヲ云^フ時^ハ兩^眼を日^月トハ陽^氣を
火^ト血^液を水^ト肉^ヲ土^ト骨^ヲ石^ト肌^膚を
金^ト毛^ヲ髮^ヲ草^木トハ耳^鼻舌^ヲ始^メ四肢^ヲ有^情
又^身を君^臣ノ比^ハ時^ハ鼻^口眼^耳ノ定^ヲ以^テ余^ヲ
足^ハ良^ノ加^ハ其^故ハ鼻^口眼^耳ノ定^ヲ以^テ余^ヲ
ハ四肢^ノ意^ハ任^ハ働^キを成^テ諸^鼻口^眼耳^ヲ始^メ四

敗百骸を衝く有りハ何物ありすと云小是即靈也
是を天地の上して云時ハ即一元氣是ありと云るハ
佳き此喻ハ 諸石の安萬郡美地麻美豆保乃計乃不多
通乎加波世云こと有ハ即先天の事あり歟小後天の
養育有て歟身を存つ所由ハ天津靈ハ上天の主
宰と御在ハ坐テ天照太神と姑く見奉る可ハ水と火
とハ二柱御祖神ハ取ベハ其鎮火祭詞ハ伊弉册尊
の火神を生給ひて其伊弉諾尊の御許を放りて黄泉
国ハ御在ハ坐テ時の御言ハ吾名妹能命波上津国乎
所知食倍志吾波下津国乎所知申年云こと有る如く
して彼国ハ御在ハ坐テ半途より引歸ハ御在ハ坐テ

水神王神等を生せ給へる是火神の伊弉諾尊ハ屬き
水神の伊弉册尊ハ屬奉るせ給へる證あり凡火の上
小靡き金水土の下ハ沈むハ亦自然の性ありが歟ハ
天地の定位して交を成さず歟を以て凡火の金水土
ハ交ハり金水土の凡火ハ相交ハるを以て造化の妙
用を成テ事あり故伊弉諾尊と伊弉册尊と別處を建
テ天上日之宮と地下黄泉と小放り御在ハ坐テ現身の
世を相保ハて御在ハ坐テ御事あり上下の引カコ云
るおむハ二柱神ハ持分ハり給ハる御事ありけり
以て水火共ハ其性ハ任ハる其處ハ歸テ事を成して

△此第一等古語
 此阿萬乃保乃計都
 知味至阿治字奈加
 知仁保連伊大項
 古登乃太聖邪流
 字都保止之底云
 と有る是より如以

火の性ハ上小升るむと下所以小人 飲食を為れハ
 其気毛穴より漏ル天小帰る故小空腹小成り水の性
 ハ下小降るむと為る故小二便と成て降降以下
 相引（て所在坐了所處）を以て活るを止（下）り引（下）ず下より与ず成る時ハ
 必死小至る者あり是即風火の止小飯り尽き金水土
 の下小沈み竟るを以てなり（但火ハ升り水の降るハ神
 小下ハ譬ハハ天地の定位の任（性あり有りれど其
 下小置（く）か如くして如以（く）して終日終夜以て煮る
 とも終小温湯とい（）成べく（）ざるを其天地の定位を
 相易て火を（）下小置き水を止小置（く）時ハ忽小熱湯と
 成る小至る者あり人（）類鳥獸草木の生立（）り理ハ等
 く地（）下より水（）引（く）故小枝葉共（）天小尊（）有り天上（）火を
 以て止（）へ引（く）故小枝葉共（）天小尊（）有り天上（）火を
 津液を止（）へ引（く）止るハ火（）具火を（）押（）ふ者ハ

津液の上下より相引が如く又其如くして世小
 存る事あり所以か食を断つ時ハ死小至るハ升る火
 気を押（）へざる故（）火気天上小尽（）小飯り竟て死る事
 あり以て人ハ更（）の云（）世中（）小生（）と一活る物
 共ハ水火の定位を相易て共小交（）ハる故（）ある事を知
 る可（）然（）北（）先天後天共小古（）の如くして水火の交
 り有る事疑（）不可（）○茅三章小云く保乃解波久知共
 り有る事疑（）不可（）○茅三章小云く保乃解波久知共
 里伊剝波奈與剝波故備互奈伽和（）仁保乃岐波故比
 互美豆阿治平詞母反甫解乃暮世互字奈自興剝阿萬
 祢久母登須治耳伊剝民字知仁免俱剝奈訶味太仁訶
 反剝止土免天奈可吳仁雄差年と有る以ハ茅一章ハ
 阿萬乃保乃許（）ハて茅二章小謂（）ハ美豆保乃計乃
 不多通平加波世と有る事ハ趣（）あり事已小傳廿二

今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...
 今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...
 今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...

二 小粗注せざるを今茲小てハ奈しく説ハ一儲以小謂
 一 保乃解ハ唯火の之を云ふるが氣と相交りて即
 風火の俱々ふる者なり其證ハ以久知典里伊剝波
 奈典剝波故論至と有る其流裝條第三章小阿之計乃
 久知波奈珥伊流毛乃波と有る惡氣小て
 清氣おろぐれりる氣の口鼻より運入不證文あり
 儲以保乃解の体ハ火其小乘て
 由乃其小奈ハ加和多ハ五藏を摠云ふるを以小
 一ハ肺を指ふり其ハ以小保乃岐波故比互と有るを
 第十章肺條小保乃解平伊礼伊陀須久久倭奈剝と有

今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...
 今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...
 今九章... 小美豆... 可味... 倍保... 計乃... 辰乃... 比伊...

思合す可一次小美豆阿治平訶母反ハ水味とハ上
 二百 小云るが如く飲食の事あり 訶母反ハ釀成の義
 小一其飲食の物を消化了を云ふ小第十五章脾條小
 本濃計平太次波比伊比不具字保乃記天訶門反儼須
 之有て肺より受て火氣を蓄ハハ胃を熱きて釀一成
 之を云ふなり其第十四胃條小有知仁濃美九日乃毛乃
 衰平差免訶 毛反天と有る是なり 小甫解乃暮世
 互ハ第第四章水條小甫乃岐能暮世と有る等しく其飲
 食を釀成ニセテ其精粹ニ成て 身体を循るむ為小先止小升る
 事あり其三小字奈自典剝阿萬祢久母登須治耳伊剝

小茅四章水條小甫乃岐能暮世七登寸治仁伊里伊
 路味底知土甫登奈刹と有る是して水液と共小循
 事ふり故右小引る流持條茅三章小何之計乃云布
 俱之典哩毛登須治仁都多比伊多理互と有る以ハ気
 を云ふり其茅四章小何志阿治衰云保乃岐能甫之
 世屠須治仁通太比无美鷓知尔非路支と有る以ハ水
 を云ふり以二共小火を得ざれば道無きが為小以
 の保乃解と共とふる色以て具條理を知べ一借字奈
 自ハ和名抄小項和名宇須後也と云々是して以ハ謂
 り凡門の辺を云ふり世登須治ハ謂ハ路の事

△何を以て水の物と
 不してふ才去字等
 三條小旨約波先登
 奈刹と有る皮層と
 末一藏府とす考
 小對て内を本と云
 平あり内中なる前
 留多故才七章内
 の條至仁帯登都
 久も能の中知は派
 云一向布又中卷才
 條味座乃條前知の
 智乃味條解とす母
 止知乃條解とす母
 止し肉めて肉中の血
 止る由ふ又其才上
 條蒙唐乃味座の中
 小知之信乃伊呂味
 味奈流と有る是又
 條の病肉の笑ふと
 云う以て本取て云
 肉中の肉脈ありと云
 事を明し可一

を云ふり其四小民宇知尔免俱刹小下卷知須地條
 小日登能知美知能可典波典都地末利古能多備仁登
 度末曹夜仁波多知末里典多備以仁波多知末利典多
 備阿波世天比登比二登夜仁比登典呂豆美知末里耶
 本余写能伊喜乎比登二須と有る以を云ふり五小奈
 訶味太仁訶反刹止士免天ハ中藏の胃より起りて項
 小上力
 藏小
 十一章心條小知志保伽門反伊路免奈訶吳衰弘差无
 報乃解乃泥衢檄難釐と有る是して保の解ハ心藏を

本よりして其を出入の門戸と爲る由あり奈加吳ハ中
心と云事なり其ハ五藏の根本小して其中府小位
たり謂ふ多事下境又其を第八章中腹除小ハ貴久囉火藏と見え第十章
肺條小ハ保久囉第十一章心條小ハ甫俱囉と作り共
小火藏の受ふ事にあむ合せ思不可うけり右の
牟を輔仁本ハ雄差万礼利と有り何れかてハ有ふ
し諸右小謂ゆハ母登須治の事小就て経絡の事を云
るハ其経脈云ハ往血ハ道路小して其往ハ小ハ氣
を主とて飛動ハ故ハ医家小以て其往ハ小ハ陽
脈と云て即天行ハ左旋ハ象云者あり又絡脈と
云ハ復血ハ道路小其復ハ小ハ血を主とて静流
る故ハ医家小以て其復ハ小ハ陰脈と云ふ即地
動ハ右旋ハ擬ハ事小息云奇ハ陰ハ者あり即地
堂小ハ肥後國人松原唯一ハ内経ハ達識あり其説小
云く経者往血ハ道路而始者復血ハ通路也経脈篇所

ハ以入雅経ハ雅ハ夫
水説之ハ胃也胃雅
汁液ハ胃消化ハ以
液ハ胃ハ所出
而入下腹ハ漸上付
上腹と和肩下之絡
脈會大絡於心
包絡乃其液與故
血俱出心ハ絡入注
於肺而葉為肺氣
所鼓者復ハ鼓於心
主故下直ハ明鼓動
ハ入与上腹ハ府之
也云と云ふ也

謂経脈十二者伏ハ肉之間而不見諸脈之浮而常見者
皆絡脈也是其具十二者出心上行ハ左前後行上
者四謂之上行経脈也岐行兩手表裡者四謂之旁流上
脈也出心下行岐行兩足前後者四謂之下行経脈也上
下左右相合十二也絡脈者貫経脈之支別而傳其血漸
々湊合成上下二幹而復心包絡也云ハ云云ハ以て其状
をハ知云ハ第第四章小云く美豆波能民日乃安治万計奈
剝自久智典剝奈中可咏太仁伊剝入萬自落保乃解仁訶衣
世天甫乃岐能上暮世本登寸治仁伊里伊路味底知士甫知
登奈成剝保裕寸多温止布萬多可波半太反仁由久蒙乃波物
伊路要奈区民豆寸念斗奈剝須惠寸多登布と有云其
美豆ハ第一章小都知味豆阿治平奈伽和太仁伊連伊出
太須云と有云小忘へて飲食を惣云所云其飲食

今第九卷阿奈條小
能字度上以美至阿知
手伊流と有と以知

を調ふ本不就て歟味を立てハ先云ふなり其飲一能
民已日乃安治味万計奈剥設也と云ふ安治味万計ハ物小和十
調ふるを云て湯液酒醬ハ飲物なり穀肉果菜ハ食物
なり何れ其味無き水を合せて為ざれば各其味ハハを成す事
能ハざる故ハ水ハ飲食の味を儲備ふる物なりと不
り其二小久智典剥奈可味後太仁伊剥中萬自倍ハ以りて
ハ奈可味中太ハ胃を云ふ第十四章胃條ハ伊日婦具
者云濃美九日乃乞乃袁乎差免云と見え又中卷
浣并條第四章ハ阿志阿治袁味叱囉比天伊比布具餘利
云と有を以て善惡共ハ胃中小納る由なり其萬自

陪と云ハ水と味とハ別々ハ飲ハ食ハ為事おれど
も胃中小入てハ共ハ混和ハるを云ふなり其二小保乃
解仁訶袁世天ハ輔仁本世之ハ作れり右第三章火
條ハ奈加和中多仁保乃岐波故比運五美豆阿治乎訶母反
と有ハ合せ見不可ハ即水穀を製ツクリ化して營液を醸造
して氣血を成す物ハ即胃の官能ノカワ所以是なり其三
小甫乃岐能暮毛登寸治仁伊里ハ第三章火降小甫解乃暮
世互字奈自典剥阿万祢久母登弟知耳伊剥と有ハ以
りて其道路を明くむ可くふむ有けり其四ハ伊路味
底知士甫登余剥成ハ具始胃中より水火ハ相醸造りて

△有る事免の候
△中巻 葉堂乃味
座條 小美豆 祿波
須 伯礼 於止 踏反
と有る 美豆 祿波
と有る 須 伯礼

△有る事免の候
△中巻 葉堂乃味
座條 小美豆 祿波
須 伯礼 於止 踏反
と有る 美豆 祿波
と有る 須 伯礼

其を火氣の共ふ上りて項より本筋小入る迄
唯の津液小して謂ゆる宮衛の管ふるを以て至り
て始て本筋小違ふ時心始て色有て血液と成る是即
其宮衛の修理 小多事下ふる知書小注 可一其五小
保祿半多止布ハ第五章蕃豆條小蕃豆波致音補乃須
俱別有満記字愛羅美須寸免互保念乃汗知身伊別祿
萬 之旨呂冥天保豆祿止奈累と有る是なり其六小
萬多可波半太反仁由久蒙乃波伊路要奈邑と云右小
謂ゆる毛登寸治小入る物ハ忽小色にて血液と成て
身中色相循還るを具本筋小入る物ハ色目無く

く猶本の津液の仕ふるを云あり其六小民豆寸念斗
奈剥ハ寸念ハ和名抄小髓 和名 骨中脂也と云ふ是ふ
るハ以て其ハ異ハし髓の如く黏有る物ハ
猶水の状ふる故小水髓と云ふ其七小須惠字多
登布と云ふ末ハ第五章蕃豆條小訶波波多反波寸惠
奈剥音新波毛登奈剥咏太布俱波奈伽難剥と有て肉
を本と一藏府と中と為る並小皮膚を末と云ふ是ふ
り諸右件血液小水髓ハ多登布と有ハ潮
満事と潮の混ふる云ふ其と同言小して以ハ血液
ハ骨と滋潤ハ水髓ハ皮膚を滋潤事と云ふ然一

口才九章阿奈條
小計阿奈條係
須惠子保太之

て水髓の皮膚を滋潤し其餘剝有る物或ハ目
汁と成り鼻液と成り唾と成り涎と成り又ハ熱汁と
成り蒸気と成て洩出る事云ル更ふ者乃第一章
小都知味豆向治字奈伽和太仁伊連伊太須古登乃太
要邪流字都侍止之底見又有を相考合了可くふむ有り
乃猪右小云々管衛の事ハ十四難小 管血之本也
其状潔白如乳汁管衛 生會焉云管者出於中焦是
也邪客為云管氣者必具津液注之於脈化以為血衛者
氣之源也即含生衛中者七盜水穀之精微所萌出於下
焦少發宣於上焦者也云々管衛生會焉云管在脈中衛
在脈外甲乙經云夫脈者血氣之府也中之觀之則管共
衛共入脈管而行之也勿論矣血者有形而必行管中氣
者無形而其餘勢果多管外故謂之管行脈中衛行脈外
也夫管衛血氣其本雖為一物以其始言之則謂之管衛
以其成言之則謂之血氣又血氣謂其本管衛謂其用管衛

如人之有名共字也蓋管液之始出腸也虽含自然之温
蒸衛氣於其外而非灑下焦和水津未能萌動發也
と有り上なる事三章の末小引る共を合て方と可
き事乃大地小管水髓の皮膚を濕一區圍寸事ハ先
液の経絡の間小往來ハ状ハ水髓の表皮の間ハ在り血
不カ如し其餘ハ皆土小ハ人身上ハ何海の巡れ
乃大地の厚ハ九百七十里余ハ物ハ海
大地の如きハ如何ハ大洋と云ハ其深漸ハ二里ハ過
ハ其皮膚の如ク然レハ大地の皮膚ハ何海ハ二里ハ過
底之田小達事と云ハ如ク上ハ下ハ左ハ右ハ
右ハ左ハ人ハ身ハ経路ハ如ク水脈有テ大地ハ物生
と為テ徳を具ハ人ハ身ハ天地ハ人ハ身ハ天地ハ
事奇一ハ神ハ貴ハ小 〇第五章小云々蕃豆波致
妙乃須俱剝有満記字愛羅美須寸免互保念乃行知

〇日本書紀傳二十九

〇三百二

耳伊^入剝^城祢^の万^白之^旨呂^眞眞^眞須^隨羊^登南^成剝^中奈^訶倭^多仁^伊剝^入
天^保豆^祢止^奈累^訶波^波多^反波^寸惠^未奈^利旨^新波^毛登^本
奈^七剝^藏咏^太布^府俱^波奈^加難^剝と有^三以^蕃蕃^豆
も甚^二妙^小奇^一き物^小にして已^小傳^二二^十二^三ハ^十小^注
セ^三カ^如く以^ハ津^速産^靈神^と御^名を申^テ謂^レハ^津
と云^物是^る乃^其津^ハ液^汁の^名不^りけ^レク^神靈^の火^を
を^含ひ^小因^テ蕃^豆と云^フ 乃^レ彼^合匱^要略^小五
臚^元眞^と云^物是^る乃^儲以^ハル^先天^と後^天との^差別
有^テ先^天の^ハ体^小して^後天^のハ^用ふる^ル如^ク其^先
天^乃ハ^以第^二章^小比^壹乃^美乃^奈連^流半^自免^波安^天

万^津都^美他^印麻^靈美^水豆^火保^乃計^乃不^多通^乎加^波世^保豆^祢奈^成
理^の知^血之^液保^奈利^士と^奈利^云と^有て^以ハ^ハ血^液なり
小^因て^先小^成出^たる^物小^{して}天津^靈の^水と^火
と^二氣^小相^参り^て成^出た^る故^小其^体ハ^水小^{して}
火^小因^て動^き天津^靈を^含み^て甚^ク奇^ク妙^不る^物
小^{して}一^身百^骸五^藏六^府の^根元^是乃^然れ^ハ以^保
豆^祢小^ハ彼^元眞^の字^を假^小當^て注^す可^きあり^若て
以^第五^章小^ハ後^天の^保豆^祢小^{して}凡^人の^世小^在
乃^ハ先^天の^生命^を保^らて^天年^を存^らぶ^者ハ^穀氣^を
を^以て^以を^養ふ^ハ其^水穀^を胃^中小^釀造^りて^血液^と

八言分分其其其其
の中を精液して其
精粹しく微妙なる
物の有るを

成し心藏より出して其の中より精粹しく微妙なる
物を選取り頭脳に納めし一身百骸五藏六府を主と
しして先天の元真より血肉を成せしを後
天の先血肉有して然後小元真有り同物なり
て其成る基を異しす所以て今姑く後天の元真と云
ふは其具混れ無き一むむ為ふり一小蕃豆皮致旨補
乃須俱利有満記乎と有る致旨補の芽四章水條小甫
乃岐能暮世と有る寸治仁伊里伊路味底知士甫登奈利
保祢乎多止布と有る血液を云ふなり俱利有満記乎
ハ勝れて可美きを稱云ふなり二小愛羅美須寸免互ハ

撰進むる小謂ゆる粹を抜出する事あり三小保念乃
汗知身伊剝ハ右小引る芽四章水性小知之甫登奈利保祢
乎多止布と有る其骨を混へたる血液の精粹なる物
内小透り入る由ありハ必骨中より其を引く神有て
必其小忘ふるなり是向決気為小其理覆世汗出漆
骨屈屈伸補益脳髓皮膚潤澤是謂液と云ふ又曰液眠
者骨屈屈伸不剝色大脳髓潤澤耳數鳴と見元津液
別論小五穀之精液和合而為膏者内滲入於骨空補益
脳髓と有り又元命包小膏者神之液也と有る是ハ
当れ四小祢万之ハ為延撰延て結延を生ずを云ふり五小
旨呂眞負ハ血液の本ハ一人水穀を食ふ時ハ必胃
小達るなり以時肝より属官の膽汁を出し時より小

其属官の中焦 液の甘き物を出し其苦くして温不
 る物と甘くして寒たる物と打合交りて脾胃の中間
 小在る幽門と云ふ位く時ハ穀氣を醸成して謂ゆる
 管液を製化する以即氣血の本小して寒と温とを其中
 小含いて腸間より下焦小送る 其時ハ滯の如くか
 る者ふり其ト肺の本小上焦小送る 其即三章火條小美豆
 阿治乎訶母反甫解乃暮世互云し 第四章水條小奈可中
 味藏太仁伊喇萬自陪保乃解仁訶 蒙世天甫乃岐能暮上
 世云しと有る是ふり其水火の寒温ハ膽汁の若きと
 焦液の甘きと小又配つ可し備其上焦より肩下カ絡

脈小和以大給小會すり心包絡小入り肺小注きて大
 小鼓アツカ素れ赤汁赤之成り心藏小入て其より十二経小
 循環り経の支別小至り絡小傳ひて往來極り無き
 内小右小謂ゆる元真ホを生し出る事ふるが以時小
 至りてハ右の赤汁より滲入る時の水の如き者ふれ
 じん具ホネ骨空ホネ小ホネ粘り以ホネ於て白液と成る是ふり是
 即肝と脾との妙用を為す所小して心と肺との活機
 小因れり然して以液汁ハホネ終小腎小結ホネ心聚る事
 小なり次小云を見べし 諸以ハ大同類聚方小斯々變り
 其具ホネ一也事共ハ例の格原惟一ハ説ホネ取れり金匱
 要略ホネ上工治未病何也師曰夫治未病見肝之病知肝

△字鏡、心、骸、字
 の下、身骨、諸名、後
 補、け、有、れ、い、又、須
 年、自、流、と、し、
 り、り、り、字、鏡、集
 小、以、字、を、傳、能、須
 知、又、保、祐、能、那、加、能、何
 那、又、保、祐、能、那、加、能、何
 阿、天、良、と、有、令、と、後
 小、字、を、依、て、あ、ま、れ、る、言
 こ、回、れ、あ、ま、れ、る、言

知得解当先冥解と有と城人の解小據夫人補統先天
 之生命亦保天年者穀氣之養也割熟水穀所以成氣血
 者胃也助胃寒溫得其胆汁典中焦液也以章言時
 而宣中焦液言肝而宣胆也夫胆汁者苦而溫中焦液者
 日酸而寒也相共注入幽門製作穀氣釀造管液為氣血
 之本寒溫得其所也經云十一脈取決於胆由是觀之則
 血氣之所行藏府百骸之寒熱勝復莫非皆胆中焦之
 過不及故仲景雜病論之初舉其要而為治未病之法也
 意肝病傳脾者肝火盛則中焦液衰百体熱勝之氣也當
 先冥解者酸寒生津切熱也云々云々甚奇也
 説小あり 其六小須年成登南利八和名抄小髓野王云髓
 有ける
 和名 骨中脂也之有是是なり其言美已小傳十二
 須年 丁小注をか如く須年の須ハ果究の果小同一く骨中
 の空虚なる所と云以年の熱有る由少し即骨中の脂
 なる謂ふるのみ也

△儲中老老屋乃味
 坐後小奈豆に記
 能者厚木味に記
 奈須と有るは事小
 記て作の

須年とハ保祐能奈豆伎豆とハ訓たり又和名抄を考ふ
 小腦 和名奈豆 頭中髓腦也之所見たる奈豆伎ハ頭腦を
 本とハ骨幹ハ来末ふる故小骨中脂モハ保祐能那豆伎
 とハ云ふより斯れハ此小謂ゆる須年と云ハ先頭腦を
 先と為る者ふる事決けれハ腦モハ須年と云ハ髓
 をハ奈豆伎と云て違ハざる可ハ儲以須年と次小出
 たる保豆祐とハ一ふる物なり一ハ腦小行一ハ腎
 小行く者ふるを以て云別たるめとふる事ハ第九章
 阿奈條ハ保須祐と有を以て知べきありハ 腦小
 髓小共小奈豆伎と云客美を思ふ小奈豆伎ハ

○三五六

名して寒熱痛痒を覺り色香味を識の生養言動を
 令成ヲ謂ふり物有れば事有れば名必有と云
 ふ豆反ハ著ふり右の覺り識り成す所有と云ふて心豆久又
 思都久ふどゆ都久是ふり偕和名抄ハ顛和名加之良
 腦蓋也弱腰俗云比止頭骨也ふりと云ふ以て腦
 髓と同トく骨空の脂ふり事を知る時ハ以章ハ著
 豆波致眞。血液皆補乃須勝俱剝有満記サ乎。疾變羅美須寸免互保念骨
 乃汗知耳伊剝ハ祿地乃之旨白呂眞須。髓年登南剝成と有ハ全
 く腦髓を本ハ一て骨髓ハ及ハる事ふり著明ハりゆけ
 る故以腦ハ一ハ十の綱を打延て一身諸部ハ且りて

精の府ハ故ハ和名抄ハ首和名加
 獨也言処體而獨貴也宇倍と有ハ共ハ加宇倍上方を兼てハ神方ハふ
 可ハく賀之良ハ神ハ実ハと聞え次ハ顛會一云天和名何愈太萬
 一云顛訓上と有ハ何太萬ハ天ハ靈ハのめ笑ふるを思ふ
 小決めて以て腦ハ因ハル稱と聞えたハハハ偕心藏
 を中心ハと云ハ火藏ハと云事以書の趣ふるを思ふハ心
 至ハ天日ハ一て頭腦ハ天極ハふり日之少宮ハ當りて
 心ハ心の宅ハふり腦ハ靈ハ舍ハふり心ハ神ハふり腦ハ精
 かり神能く精を生ハ精能く神を生ハて互ハ相結ハ
 少相合ハて奇異ハ靈ハ一き妙用を施化ハて窮ハり無き者

素問脈要精微論頭者精明之府頭傾視深精神
將奪焉之見元俞包小人精在腦之云維南子
注小精者人之氣也之云以莊子注小精者物之真也
注一字與小增誤也引之注其物之純至者皆曰精之有
て精細也密也粹也潔也之注其字若其精也之謂
以之後天之養不力生不所以小精字ハ末ハ以青小
是ふり若て金匱要略ハ生ハ人精ハ穀氣ハ生ハ謂
也之云ハ説文ハ思ハ字ハ容也ハ心ハ以ハ肉ハ有ハ其ハ
頭會腦會也象形之有也ハ以ハ心ハ以ハ肉ハ有ハ其ハ
事を知ハ一安ハ一ハ傳ハ二卷ハ四ハ一ハ身ハ一ハ主ハ
べきハ知ハ一安ハ一ハ傳ハ二卷ハ四ハ一ハ身ハ一ハ主ハ
金匱要略ハ夫人稟ハ五常ハ因ハ風氣ハ而生ハ長ハ元真ハ能ハ生ハ
物亦害ハ五物ハ如ハ水能ハ浮ハ舟能ハ覆ハ舟若ハ五臟ハ元真ハ通暢ハ人
即安和ハ有ハ松原ハ惟一ハ注ハ小ハ按ハ五常ハ者ハ四時ハ之ハ常ハ氣
也天有春温發生之氣而人有呼吸達表之肺天有夏熱
蕃長之氣而人有血脉流動之心天有秋冷成收之氣而
人有筋絡收斂之肝天有冬寒閉藏之氣而人有津液潤養之脾也
固之腎四季有濕土中和之氣而人有津液潤養之脾也
爪者指前五氣之言之者也能生万物者常氣也而其害

之者愛氣也五臟元真通暢者即津液別論所謂五穀之
精液和合而為膏者內滲入於骨空神蓋腦髓者即營衛
之精粹也起出一身百脉溪合成筋紐入於脊髓者左右
合六十條入頭腦者左右合二十條也凡起出眼耳鼻舌
五臟六腑等者皆於頭腦而具起於血室部任左右相
分接腎所繫焦而上行着名為腦液道自胃口經心肺亦
直行者名為胃口液道也起出於頭面頸項胸背腰腹四
肢陰具子宮膀胱直腸者悉入於脊髓名爲表液道也起
於橫膈膜而入脊髓合表液道者名爲隔膜液道也其液
較潔如玉髓能合神畜精常順逆出而爲潤養運動自在
謂之五臟元真通暢之云是也其明之者思入
常ハ西洋ハ學ハ不輩ハ不漢家ハ漢家ハ心ハ小ハ精ハ神
ハハ笑ハ小ハ堪ハ不事ハ兵ハ不漢家ハ漢家ハ心ハ小ハ精ハ神
を瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
と云ハベシハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
大ハ心ハ小ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
以ハ心ハ小ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
冥ハ心ハ小ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
其七ハ小ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神
いハ心ハ小ハ神ハを瀧ハたりハ西人ハ唯ハ腦ハ小ハ精ハ神

合故中卷才六餘蒙家
 層乃味差小肉筋骨
 火氣水根血脈等力
 七を本一才八性茶
 訶乃味座下肺心腫
 肝脾腎腸胆の八
 を中一才七性漢
 會乃俸謝小痛疼
 動之終破後痒癢
 瘡毒の如く表皮
 小在る者と云末
 云り

訶俸多ハ腎を云ふり其ハ第十六章腎條小務權登波
 云ハ保精液豆祢精卒須精比何都无聚と有ハ引合ハ事ふり右
 三百 小保豆祢を元ホッネ眞ハ字ハ當ホッネて云ハ云ハホッネ精液
 三下 小保豆祢を元ホッネ眞ハ字ハ當ホッネて云ハ云ハホッネ精液
 の字ハ移一當たるハ上件須年登南成剝ハ謂ハハ脳髓
 小て一身を利判リする物ふるを以ハ彼八十綱打掛て百
 結 小結ハ八十結小結下ハ其終ハ小ハ腎ハ結ハ
 力聚ハ事下三百四小具章小就て注すを以ハ知べハ
 其ハ小訶波波多反波寸惠奈剝旨新波毛登奈剝味太
 布俱波奈加中離剝と有ハ肉を本ハ一藏府ハ中ハ皮
 膚ハ本ハふりと云ハハ人体ハ定位ハ物ハ其出表立

の状ハ亦然り其ハ上二百九 小注ハ以第一章ハ文ハ
 小保豆祢奈理知元眞之保奈利士二奈利須知奈利保念奈
 剝南中訶味多奈狸典通依太奈剝訶波奈利ハ有ハ次第
 を見ハ一ハ元眞あり二ハ血液あり三ハ肉あり四ハ
 筋筋あり五ハ骨あり六ハ中藏あり七ハ四肢あり八ハ
 皮あり以三ハ肉六ハ中藏ハ皮ハ順次を以て本中
 末ハ次第ハ定マハ事ありけり 故第四章水條ハ
 由久蒙乃波伊路要奈區民豆寸念 斗奈喇須惠平多登
 布ハ有ハ以ハ上ハ皮膚を云て下ハ末ハ云ハ云ハ
 小合セ考ハ可
 事ハふりハ
 ○第六章ハ皮ハ完有物ハ称あり

其文。○小云く訶波仁阿奈都久毛乃万奈
古美民阿那波奈已致保曾祢圭阿南久楚阿南伊婆利
阿南之有て次ふ茅九章以用を云る者ふり訶波仁
阿奈都久毛乃と云ハ表皮小完有る物と云ふて一
萬奈古二小美民阿那三小波奈四已致五小保曾祢
母之茅九章完條小保楚波保頭乃毛登根と見え茅十
七章賜條小吡僧倭太波保鋤乃烏波可太用梨云こと
も見えたれば保曾と云小根の言を添はるふりけり
和名抄小腕腕腕和名保曾腹孔也と有り言美ハ合ホ窄スふ

るり又ハ一身を摠括る根本あり所少一有れば大統
の義少て小有ひ天孫降臨章茅三一書小腕字を
保曾能衰と訓不其ハ腕諸云事ハハタク保曾と云けり信曾
ハ音轉音阿毛文
ハ小伊婆利阿南ハ陰處を云ふり右め如く其穴ハ所
ありて兩眼兩耳と鼻の兩穴を合せて十門之成
ふり。○茅七章小云く至尸仁裳登都久毛能衰乃解知
志流奈豆記保豆祢須智保尼須屋奴訶婆於久婆之有
乃以至尸仁裳登都久毛能と有ハ凡て疑固る管有ハ
肉小縁きて生る部属を云ふり至尸ハ和名抄小肉和

○其事下ふ茅九章
カマシイ其用を注ヤ
レハ合せ見十五ハ
可一又中卷才九性
位岐味生ハマヤ
毛穴を塞ふハ
十三條ハ
例多ハ
不可く物ハ病と云

合但血けを肉に属せ
 為す小肉有りへ
 具不三言ヲハ謂ハク
 母登強治の本ハ
 才ニ三言ヲ登豆條ハ
 旨新味を登豆利
 二有ハ肉中ハ
 筋脈多シ謂カク若
 中味味座乃傳訓
 知ハ刃立者乃味附
 の中ハ此止知乃傳
 邪ニ有ハ石ナ固ハ
 肉中ハ血脈多シ事
 才ハ本取本血多ト
 の本ハ即肉を多稱ハ
 事ハ上ハハハ小臣セ
 々を以考合ハハ

之肌膚之肉也と有り猪肉ハ締ヒ之の美ハ津液の流
 動ユク小對へて歸固キナリ謂ふル其ハ小張乃解ハ芽
 三章火條ハ其文ヲ合セて續べハ肉ハ水土の質
 小ハ火氣を合ムを云ふル二ハ知志流ハ芽四章水
 條即其文ヲ三ハ奈豆記ハ芽五章小謂ハ芽五章
 小保豆祿ハ云ハ上ル芽二章小謂ハ先ノ元真小
 一ハ一身の根原ヲ後天の養育ハ資テ出ル者
 小上ルハ腦ト云ハ下ルハ髓ト云ハ本一物ハ
 小を以ハ其腦髓の餘刺シテ腎ハ入ル物ハ謂ハ

△けれハ向齒ハ
 こと並ハ事ハ
 一ハ其前齒の二枚細
 白ハ並ハ事ハ板ハ如
 く多ハを以ハ板齒の
 名ハ有リ

精液是あり五小須智ハ即経絡を云事己小芽二章
 小注セルカ如ハ六小保尼ハ大根ハ芽
 三章小就テ注セル七小須堅ハ骨空ハ充テ脂ハ保
 豆祿の属ハ事己小芽五章蕃豆條小注セル八小叔
 訶婆ハ久婆ハ和名抄小枝齒ハ和名叔可波ト有リ是ハ不
 牙ハ於久婆ハ同抄小機謂之牙ハ和名一云在齒後最近輔
 車者也ト有リ牙を云フ但輔仁本ハ小ハ於久婆
 書ハ無キハ却リテ正シハ唯叔訶婆ハ之ハ今ハ
 俗語ハ多シ○第八章小云ハ娜訶波囉仁都ハ裳濃布
 云フ事ハ多シ○第八章小云ハ娜訶波囉仁都ハ裳濃布
 玖羅費久囉ハ裳倚ハ吳新伊飛ハ婦ハ良登久楚ハ和太

△前後違ふ可し所
とて四章目とてま
かた可なり事なり

○第十卷の以前小
唯阿多乃知阿知
と有り其以下
件は記号文有を
右具所小試し説
けられははは

と有り其小娜訶波囉と云ハ和名抄小腹和名波良所以容
裏五藏之者也と所見たる是ふらガ以て服を加太波
良と云々即傍腹カタハラの美ふ其小對へて中腹と云ふ
り其一小布玖囉肺ハ第十卷肺條不在り二小費久囉心ハ第十
一卷心條肺不在り三小我裳肝ハ第十二卷所條肺不在り四
小倚肺ハ第十三卷膽條肺不在り五小與吳新肝ハ第十五卷
所條肺不在り六小伊飛婦俱胃ハ第十四卷胃不在り七小牟
良登腸ハ第十六卷腎條腸不在り八小久楚味腸ハ第十七
卷腸條腸不在り九小以ハ目錄の如き所なり。○第九卷
ハ上ハ謂ゆる第六卷訶波仁阿奈都久毛乃の本説ふ

り其文穴云々阿奈仁訶典布院訶珍と云ふ阿奈
ハ眼耳鼻口膈毛孔尿穴尿穴ハ竅小往來有る事也
注下ふり一鼻半奈波火係乃計火袁伽典波世火訶袁火剎子新火
流火云ハ第三卷火保乃解波火云々波火奈典火喇波火故備豆
と有り是ふり其訶袁火剎子新火流火と云ハ香気を受容る
門火ふら火ふり二小滿奈火故波火毛能美流火ハ眼ハ物を移
して心小達下官ふら由ふり三小美火と波火於屠袁岐火仗
ハ耳ハ声音を聞く所ふら謂ふり四小能火牟度波美豆
阿知半伊流火とハ和名抄小咽喉火無止火と有り吞門火不
る謂是ふら故以水味ハ第三卷火除小保乃解波火久知

△諸火之末と云い次
多の尿に備へ阿受
限と有わ向く具
事と成し外か出
る初より由下は
佐岐味坐の河と云
考合了可

典里伊^入別と有て下小美豆^水阿治^味と云る以火^火気^火の飲食
と共小口^口入を云ふり第^二四^三條小美豆^水波能^飲民^食已日
乃安治^味萬計^設奈^也別と有る水^水味^味の飲食^食と云事^事上^上三百
小注^注せ^せか如^如一其^其五小保^精楚^液波^液保^液頭^液乃毛^本壹^根禱^禱と有る
瞬^瞬ハ一身^身の惣^惣括^括ふる所^所ハ一有^有此^此ハ精^精液^液を^を行^行る^る根^根本
ふり^{ふり}とふり^{ふり}上^上第^二六^三章^三小注^注る^るを^を見^見べ^べ一六^六小計^計阿^阿奈^奈波^波
男女交合ふ依て出来る保豆祿ハ先此瞬と成して一身の基と成り
保^火乃^火須^未惠^未幸^幸伊^出太^太之^之有^有る^る毛^毛竅^竅ハ人^人の^の密^密理^理を^を云^云ふ^ふ保^保
乃須^未惠^未とハ石^石小^小半^半奈^奈波^波保^保乃^乃計^計衰^衰伽^伽典^典波^波世^世云^云と^と有^有
有^有る^る以^以ハ^ハ氣^氣を^を云^云ふ^ふり^り次^次小^小能^能牟^牟度^度波^波美^美豆^豆阿^阿知^知乎^乎伊^入流^流
と有^有る^る飲^飲食^食と^と共^共小^小入^入る^る火^火氣^氣ふ^ふり^り食^食氣^氣と^と共^共小^小蒸^蒸れ^れて

△諸路の方言かえ
りま^り事^事を^を傳^傳解^解の
ま^まて^てる^るし^し事^事あり

外^外へ^へ發^發出^出る^るを^を云^云ふ^ふて^て謂^謂ゆ^ゆる^る蒸^蒸發^發氣^氣と^と云^云物^物是^是ふ^ふり^り△七^七小
伊^尿婆^婆俚^俚安^安奈^奈波^波保^精須^液禱^禱乎^乎數^數幣^幣伊^尿婆^婆里^里哀^哀伊^出陀^陀斯^斯と^と有^有る^る
伊^尿婆^婆俚^俚安^安奈^奈ハ^ハ即^即男^男女^女の^の陰^陰処^処と^と云^云ふ^ふ保^精須^液禱^禱乎^乎數^數幣^幣ハ
男^男女^女交^交合^合の^の感^感小^小依^依て^て精^精液^液の^の聚^聚り^り出^出る^るを^を云^云て^て謂^謂ゆ^ゆ
る^る精^精道^道是^是ふ^ふり^り伊^尿婆^婆里^里ハ^ハ尿^尿ふ^ふり^り即^即尿^尿道^道を^を云^云ふ^ふ若^若て^て
以^出伊^出陀^陀斯^斯の^の言^言ハ^ハ二^二小^小孫^孫り^りて^て精^精を^を小^小尿^尿を^を小^小出^出す^す事^事と^と
云^云ふ^ふり^りハ^ハ小^小久^久楚^楚安^安那^那者^者阿^味受^未隈^隈乎^乎倚^出陀^陀須^須と^と有^有る^る久^久楚^楚
安^定那^定ハ^ハ肝^肝門^門を^を云^云ふ^ふ阿^阿受^受隈^隈ハ^ハ第^二七^三章^三腸^腸條^條小^小吶^吶僧^僧
倭^倭太^太波^波云^云く^く烏^烏知^知仁^仁阿^阿豆^豆惠^惠乎^乎多^多と^と反^反須^須穢^穢者^者九^九層^層阿^阿
奈^奈耳^耳都^都喜^喜云^云く^くと^と有^有る^る以^以阿^阿豆^豆惠^惠と^と輔^輔仁^仁本^本ハ^ハ阿^阿寸^寸

天保若囉乎忘保比伊都之依太仁和分差賀徑天伊呂
何哀以呂吹乃武度布曳仁都裁行知仁保楚良乃高豆
阿里天保乃解乎伊禮伊陀須久依倭奈剽と有ハ肺藏
の較略あり借以婦俱之の第九章ハ布玖囉と有り
和名抄ハ肺和名布久と所見たり故思ハ小婦久
ハ吹ホて之ハ気あり可くして呼吸の出入る處の謂
ある可く本草和名小栝莖菜一名落伏云と和名布と
岐と有ハ好莖ハ穴有て末迄貫通ハる由の稱あり小
て氣の通ハるを以て名と為るハ布と岐ハ吹ハの
言ハる可く母を本ハして歎々云と和名也末布ハ岐

一名於保波ヤ有ハ母一ハ莖を以て名と一ハ葉を
以て号たりハ布ハ岐の意右ハ同ト又惡實一名牛蒡
云と和名岐多伊須一名宇末布ハ岐又鷄頭實云と和
名美都布ハ岐乃美と見え以物と和名抄ハ小莖和名
三豆
布ハ一名鷄頭草其実似鳥頭故以名之と有て以莖ハ
山落馬落水落の美あり又以布ハ岐を俗ハ押並て唯
小布伎と云う又和名抄魚菜ハ鰈和名布久一
云布久用 犯之
則怒怒則腹脹浮出水上者也と有ハ布久ハ脹るハ意
布久用ハ乾瓜の形ハ菜なる故あり又万葉十六十六
小角乃布久礼と有ハ陰莖を云ハ和名抄ハ陰囊俗云
布久

利と有ふど皆其中小氣を得て脹る由の言共ふり
右等の例を推し以小保乃解半伊礼伊陀須久依俵奈
剝と有を合せ思ふ小婦俱之ハ吹肉布久布久之ハ吹
吹肉布久囉ハ吹藏ある者ふりけり之の言ハ第十五
章解條より典吳
新の所して合せ説べし階又字鏡集ハ吹肺字を布久
布久之ハ比ハ火ハ吹ハ吹謂ハ保乃解ハ吹ハ吹ハ吹
比志ハ比ハ火ハ吹ハ吹謂ハ保乃解ハ吹ハ吹ハ吹
猶考ふ可き事あり又解を布久都都志と有ハ程卷十
一ハ小臺部下して雪轉ハ片こそ給ふ云ハ甚多
轉ハ小臺部下して雪轉ハ片こそ給ふ云ハ甚多
と有ハ脹るハ意ふり又喘字を布久吸を布久年焚を
布久須囉を布久又布久鏡を布久流ふ云ハ皆同
言ハ風氣を得て動搖ハ意ありと合せて其美を思ふ
ハ風氣を得て動搖ハ意ありと合せて其美を思ふ
可い一小年奈訶美仁非路岐阿剝天ハ胸上と云ハ乳
ふい一小年奈訶美仁非路岐阿剝天ハ胸上と云ハ乳

ト上方を云ふハ保小保苦囉半應保比と有と次の心
條小甫喫囉波無祢知武差乃奈加母仁阿剝天と有と
合せて知べし非路岐ハ廣賀理ハ下小伊都ハ依太
仁和分下差賀理天と有と状を云ふり二小保苦囉半應
保比ハ心藏を覆ひて蓋め如く成ると云ふ即次小謂
ゆら五枝小別下ると物是ふり三小伊都ハ依太仁和
分下差賀理天ハ其莖一ハ下五枝小別下れる由ハ
其実ハ木葉の如く垂下りたるふり四小伊呂阿哀
吹呂夜ハ青の濃きを云ふ五小乃武度布安ハ咽ハドアエ
の聲ハ一と知名抄吹俗云乃無と云ふ是ふり即氣管
止布注

公のりて次々下心降小
汗知高豆保仁天と
有り才十六章腎性
小鳥知尔保楚葉乃
鳥都阿哪每刺亮と
有と共小一事ふ

の端緒ふる所の事ふり六小汗知仁保楚良乃高豆阿
里天ハ保楚良ハ知の言小良の辞の添たふり高豆
ハ空虚の夢ふれハ以ハ空穴の有を云ふふり七小
保乃解平伊礼伊陀須ハ第三章火條ハ保乃解波久知
典里伊剽波奈典剽波故備互奈加知多仁保乃岐波故
此五と有る是ハ火気ハ先以肺小運入る所以己小
上二百九小注ろハ如ハ即以の伊礼ハ吸ふり伊陀須
ハ呼ふり以呼吸の吐納有て人の性命を保つ事誰ハ
知れる事ふりハ小久依倭奈剽ハ括根ハ肺ハ呼
吸の吐納を主宰する大括ある由ふり儲以肺ハ風ハ

少心ハ火ふり以肺と心と甚近く親しきハ火ハ風ハ
資て燃え風ハ火を得て擣ハ理小因ハる者ふり又諸
藏の上部ハ在る事其位正小天あるを以ふり傳ハ
ハ小注せろハ加ハ日神ハ御生坐けハ所の文小故以
天柱擧於天上也と有を合せて幽深已理と思へハ
大ハ得る所有あり者ろハ
誤ハる者あり松原唯一右の毛漢人の古説ハ肺を金小
小所を金ハ配たる事古今の蔑明と云ハ依て肺を木
肺共天地呼而出息腎肝共天地吸而引内腎主疑固心
主收斂心肺主流動由之亦可知矣然而流動之根在膽
陽騰生陽中魚生營脈遂入干肺為流動物詩云東門之
柳其葉肺之可見流動搖と象と云ハ実小然る言ハ
力上三百五下ハ注ろ第五〇芽十一章小云く甫嘔囉
章蕃豆條の備考合す可ハ

日本書紀傳二十九

〇三百十七

波無祢知武房 差乃奈伽母仁阿刹天加多致非差吳乃
 娛登玖伊呂久麗奈位仁行知禹豆保仁天知志保伽門
 及伊路免奈訶吳袁弘差无報乃解乃泥衢檄確梨と有
 不甫呬囉ハ上の肺條ハ保苦囉と有を第ハ章ハハ
 費久囉と作り共ハ火藏と云事ハ一て一身の中ハ
 受納ハ火氣の聚少ハ所ハ謂ハ一ハ譬ハ天日ハ
 ハ宇宙の中央ハ位ハを具在ハ宇宙の火氣の聚中
 一ハ愈神ハ益靈ハ御立セハハハ等ハ一ハ
 一ハ和名玖ハハ心の和名無ハを管家名美玖ハハ心
 一ハ許ハ呂ハハ那加比多ハハ那佐祁ハハ年祢ハハ那

一神字難例集ハ
 神天皇御世ハ
 神ハ宮中ハ奉拜
 也給ハ所事ハ宮中
 大庭橋橋作ハ
 奉拜ハ書ハ

加畧トハ有ハ中ハ那加比多ハ中ハ火處ハ
 ハ右ハ火藏ハ同ハ美ハハ禰ハ甫呬囉ハ就ハ又一ハ
 ハ求ハ可ハハ傳ハ廿二三十四ハ注セハ如ハ無仁天皇ハ
 十七年御紀ハ神庫ハ云保玖羅ハ注ハ此ハ又天武天皇
 三年御紀ハ神府ハハ又右ハ如ハ訓ハ稱ハ和名玖ハハ室
 倉保久一云神殿ハ所見ハハ共ハ合セ考ハハハ神庫
 神府神殿ハ神字ハ保ハ言ハ当ハハハ以ハ心藏ハ火
 藏ハ其即神藏ハ言ハハ知ハ上三百ハ注ハハ如
 ハ俗ハ精神ハハハ精ハハ居ハ神ハ心ハ宅ハ所ハ以
 合セ曉ハ可ハ者ハハ即ハ心ハ天日ハ一ハ天照太神

小街在^一坐^几頭^不陽^不腦^天御^中至^守一^御在^一坐^几
幽^不陽^不其^血を^止一^腦を^成可^者高^皇産^靈等^并
神^皇産^靈等^并の^産靈^の象^どう^肝と^心と^ハ上^ハ小^位して
伊^弉諾^并の^御の^給風^火と^神の^知ア^新肝^肝腎^ハ下^小位
して伊^弉冊^等の^御の^給金^水土^三神^の知^ア所^不の^力
其^全体^を云^時ハ^大地^ハ一^即皇^御孫^等の^大街^民不^力
カ^天地^ハ合^ハ陰^陽ハ^叶ハ^五行^ハ小^矣ハ^一才^ハ也^蓮也
所^無き^不ハ^奇一^ハ也^靈一^ハ也^言ハ^絶た^ス事^不ハ^力
素^回六^節藏^象論^ハ心^者生^之本^神之^處也^其華^在面^也
其^元在^血脈^也有^テ任^ハ心^者君^主之^官神^明出^也也^也
君^主万^物繫^之以^興亡^故曰^心者^生之^本神^之心^也也^火元^炎
炎^上故^華在^面也^心養^血其^主所^故元^在血^脈也^也也^見元

靈^蘭秘^典論^ハ心^者君^主之^官也^神明^出也^有テ^注
小^任治^於物^故君^主之^官清^淨極^靈故^曰神^明出^也
云^リ又^宣明^五氣^論ハ^心調^理論^ハ心^藏神^也云^ハ大^惑
論^ハ心^者神^之舍^也本^神論^ハ心^藏脈^藏神^也云^ハ一^小
無^禱ハ^傳十^二百^二十^一小^注カ^如記^傳五^八十^一
小^身根^の意^ハ云^レレ^タ實^ハ然^ル言^ハテ^以ハ^身根^也
云^ハ一^身の^主宰^と有^テ神^庫の^所在^不レ^バ以^ハ心^藏不^力
起^ル言^ハレ^リ故^古事^記ハ^八拳^須至^干心^前と^見
元^心動^又心^息ふ^と書^ク時^ハ心^を胸^と訓^シ事^不ハ^力
万^葉三^六丁^小曾^曰許^念尔^胸已^所痛^ハ二^五十^一小^許已^念
若^胸許^曾痛^ハ五^三十^一小^安我^年祢^伊多^之古^非能^之氣^也
吉^尔と^有ハ^心を^痛ハ^由ハ^其二^十九^小村^肝之^心

卒痛見又四下 諸者心曾痛三五下 小情哀伊去吾妹
可三下 小黃葉家良思吾情痛之外有 心痛を胸
痛と見し 小其意異あ らず又五四下 小伏仰武祢宇知
奈気吉十三九下 念戸鴨胸不安急 鴨心痛又三十 恋鴨
胸之病有念鴨 急之痛と有共 ハ心打歎又心不安
又心之病有同 トきを思ふ小 胸ハ 元其心藏モ 安置
方所あり 云以て云稱あり けり借以胸ハ 一身を
主宰ある 心と云 有て 一身を自由小 使ふ君主の 者
ありけれハ又一身小 取て根元と為る 所ハ心藏を
除て又外小 物無き謂是ふ けり但其 四卷五十四下
遠多數成者吾胸截燒

又僕夫の心は心割
心又割心又割心又割
又小心をしよ心字
を以てて本心と
割を附多れに可
心も着べきなり

今空徳信後 山田の
恩の悲しく乳房の
高く 小かみし事と
一よ 小紅葉の葉を
乳房ハ 密に 有る
小玉ハ 乳房ハ 密に
あり有り

如十卷五十三下 小山霧煙ハ 吾胸誰見 者栴息十二
卷五下 小物念ハ 割西 留者 息時 裳無七下 小從聞 物于
念者我胸者 破而 摧而 碎心無十一下 小胸ハ 熱且戸開
若ふ けり有る 以等 心と云べきを藏して 胸を以て云
るか ぐり其氣ハ 心あり あり遊仙窟ハ 未曾飲炭腹熱
如燒不憶吞ハ 腹穿似割と 云ハ最勝王怪 捨身品ハ 同
乱荒迷失本心ハ 勿使我胸今 破裂裂
云小等しく 切小 歎く 云云り二小知武差ハ乳房ハ
少遊仙窟ハ 拍搦 奶房間ハ 有る 奶房ハ 割て 奶乳也と
注せり三小奈伽母仁阿在 天ハ在中間あり 又真中ハ
心得は 小僻事ハ 非ず 四下 小加多致非差吳乃煥 登久ハ
非差吳ハ絶 ちる 傳九下 小住せり四小伊呂久麗 奈
位仁ハ紅色 ふうりハ 神代ハ 無り 一物あり けりハ唯
小 向加久ふ ぐり有け りを復小 換つ けりハ三万葉

三八三丁十 小吾屋戸尔幹藍種生之七三丁十 吾蔣之蔣藍之
 花平五十五丁十 小三苑圃能幸藍花之色十一色丁十 小三苑原
 之鷄冠 花乃色二出目八方ふと有り本和名小紅藍花
 作燕和名久禮乃阿烏和名炊席色具小紅藍辨色立成
 云紅藍久禮乃阿丹 吳藍上本朝式云紅花俗用 見えたり
 玉蔣間蔣藍卷上略萬葉集歌久禮奈烏を加羅阿烏
 云詠り抑久礼奈烏と云い以物本吳国より渡参り
 て来りける由ゆて吳之藍と云を約めたり名ふらる
 其ハ韓國より傳へつる故小又韓藍と云ふるふり
 云説の如く但加羅と云い西方の国との並ての名ふ

△但播磨風記
 小楯保郡阿烏山
 品太天皇之世紅
 草生於此山故号
 阿烏山と有公其御
 世小韓地より紅
 花を奉れり小
 説て本より自
 然生ふ在を見
 出たらし小説て山
 名小カ爲り小
 可し此より紅
 草を同爲と訓
 べく書るるふり
 然る時阿烏爲
 紅花と云ふが郡
 少て本より一を
 打任せて世か多
 く用ふるは昔蔣
 命より其
 命休天皇六年阿
 紀小左ノ字之守郡
 漢理基登と訓也

北バ吳ハ吳国を指て云ふゆて吳藍と云と曰し事小
 も有べし然るを十一卷小鷄冠草と書る小説て鴨頭
 草ケイノウゲと云説共の有て分るゆりさやふ
 れども皆僻説ゆて紅花ふ事疑ひ無し内と云れた
 るゆて甚能聞ゆるふり五小汗内知禹豆保仁天ハ右小
 免の如くと云ける物り内方ハ空虚ふりて血液を畏
 るる間有りと言事ふり禹豆保ハ神功皇后元年御紀
 小無憂色宇都郡多曾と訓る小同ト顯宗天皇二年御
 都郡と訓るも右小同ト然れハ以宝鏡間始章第一一
 書小全刺以云宇都播夜と有も身を色抜ふりて皮を
 剥剝く急剝ふれハ空虚剝の急剝ふり剝す宇都と云も物を捨
 て空しく為る受りて皆内言あり可矢具小宇都煩と

○日本書紀傳二十九
 ○三百二十一

△今云抄小空小宇
都保又宇都都多
理の剣有り又路味
を宇都保都理と訓

云名の有り内の六小知志保加門反伊路免八第第三章火條小
空虚あり由あり△
保乃解波云し奈伽和多仁保乃岐波故比互美豆阿治水味
乎訶母反と有ハ水味ハ飲食の物あり其を胃中醸す
ハ血液を造成す者 あり謂あり第第四章水條小美豆波能飲
氏区日乃安治万計奈別久智典判余可味太仁伊別萬食
自落保乃解仁訶震世天と有ハ其飲食の物をハ胃中
小達して火氣小醸して血液を造るを云ふて共小相
等しき事を火と水と小分て云故小別ふるが如く見
ゆれとも然く第十四章胃條小伊日婦其者云と有内
知仁濃美九日乃毛乃袁乎差免訶毛反天と有ハ其を

以て右の二章の美を曉る可くあり有けり第十五章
脾條小預吳新波云と本濃計乎太依波比伊比不具乎。
保乃記天訶門反成須と有ハ脾小火氣を畜はし置て
其胃小火氣を傳へ水味を醸して血液を令成す謂ふ
か但妖小心得有べし人飲食を物為れハ火氣共小先
胃中に入る者あり其脾の傍ハ中焦と云ふ妖時肝よ
う膽汁を下し脾より中焦液を令出て脾胃の中間を
る幽門より注ぐ時ハ其飲食の物妖小醸成されて
膈より下焦小送るあり妖を營液と云ふ其より火
氣を以運比し肺の傍より上焦小送り肩下の絡脈小

和ハ大絡モトハ會アハ心包絡ハ入り肝ハ注ミミテ坎ハ鼓
索カルテ始テ赤汁ニ成リ心藏ハ藏リテ其ノ十二經
ハ循環リ経ノ支別エハ至リ絡ハ傳ハテ往來極メリ
無キ物ノ事ハ止ス五三百五丁ノ注ハ如クルハ坎ハ知志保
伽門ハ及テ伊路免ハ唯其大綱ヲ奉テ知ク一ノ事ハ迄ハ
抱ハリテ泥サズテ説ハルヲ坎ハ以テ甚ニ能ク聞クハ怒ス
ガハ古文ハルバ了リ故茅四章水條ハ南乃岐能上
暮世モ登寸治仁伊里伊路味底ノ知之ハ甫登奈割ト有テ
釀テ事ハ一ノ色ハ至リ間ハ小大ハ次第ハ有ル事ヲ知
ルセテハ不レ有レ者ハ猪塚上焦中焦下焦を三焦ト云フ
医説ハ三焦水穀ノ道路ハ又ハ氣ノ終ル

合第三章火條ハ小保
乃解ハ波云テ奈詞ハ
本仁ハ詞ハ又ハ止ス也
天奈ハ可レ與レ仁ハ義
年ハ有ル其ハ火元
心ハ火元由テ生ル
心ハ火元由テ生ル
心ハ火元由テ生ル

始也所謂止焦心中焦胃中脘下焦膀胱也云和
名抄ハハ三焦中焦子云三焦和名美乃和太孤立ハ中
瀆ノ府ハ有レれハ美乃和多ハ三焦之勝ハ美乃可レ見
以テ物ヲ了ス然レ非ハ可レ一ノ水ハ之勝ハ美乃可レ見
下ノ別ハ時ハ上ノ乃美乃和多ハ中乃美乃和多ハ下乃美乃
和多ハ云フバ待テしテ瀆ハ易ハ小滿瀆ハ有ル字ハ不レ
ハ水ハ乃美乃可レ事ハ云フ小更ハ乃因云伽門ハ及テ釀ハ字
美乃乃名美抄ハ都久流ハ又ハ加年ハ又ハ佐ハ都
久流ハ其ハ七ハ小奈詞ハ吳ハ袁ハ弘ハ差ハ无ハ心ハを藏ハルハ由ハ不レ
有ル右ハ小引ハ名美抄ハ小心ハ字ハを那加暮ハ有ル中ハ中央ハ
美乃乃其ハ即心ハ不レ謂ハルハ然レハ傳ハ七ハ三ハ丁ハ小注
乃如ク神宮ハ心ハ御ハ柱ハ云フ有ル新ハ儀ハ式ハ小正殿ハ心
柱須ハ令ハ中央ハ立テ之ハ有ルを以テ證ハ之ハ為ス其ハ外ハ小九
心ハ云フテ中央ハ美乃有ル例ハ孝昭天皇元年御紀ハ小

余只心用易說
卦云及於水也
心者智也
見之又手也

遷都於掖上是謂池心宮と有る池の中央の池心と云
ハ水の中央を水心と云ふ如くして池中ハ宮都を被
定たる謂ふのみ又和名抄掌四声字苑云心和名太奈古二呂乎心
也と有る手の中央を手心タナマロと云ふなり若て心を唯ハ
許との云例ハ右の手心タナマロを以第十五章解掌ハ多
奈吳と有るを始として傳十九二百二ハ天兒屋令の兒屋ハ
ハ意を倒反して云わて意除コトコロヤふハ例ハ引たる如く
斂堂を中心チウと云ハ以ハ言同ト眼ハ心ハ事ハ心取ハハ異ハ
外あり好ハ心祈ハ媚ハ心振ハ恋ハ心経ハあり斯
る類ハ何ハ心ハ本著して言共ハるハ皆ハるハ詩と

此詞ハ
字ハ
心ハ

云るを以知べし備本草和名ハ海藻之ハ和名之末ハ
一名ハ岐女一名於古と有る以物を和名抄本朝式云於期菜
と有ハ大凝オホニルノリ苔の義あり又大凝菜本朝式云凝海藻古
毛波俗用ハ心太二字云古ハ呂布止楊氏漢語抄云大凝菜と見えたり如
く凝海藻を心太オホニルノリと云ハ心ハ本ハ疑の義あり
小て古事記明宮大所歌岐肝毛向加布許心と袁陀迹心と有
ハ心を許と云て形容の呂を略けりハ鈴屋太人
ハ契沖ハ補ハれたるハ依て許ハ呂と改ハれて記傳
三十六三ハ許ハ呂許ハ呂ハ疑ハありハ海菜
ハ心太ハ凝ハ意の名書紀神代卷小田心ハ姬命ハ万葉二

△肝と膽と二共小以
心小傳ふ由ふる事
七妙ふる事共の有
とし以小

十三下小妹之心を以母加去し里と有ふと以て曉
る可し又万葉小岩根許し志伎と多く有し凝こしき
ふり己凝敷凝水敷ふど書るを以知べし岩の群がう
集れりを云り 採と有を以て心小凝り義有を明しめ
知れりいハハ上件甫唄羅ハ神府ホダにて神氣の凝こし
小唄小在り所以ふ知るめら事又傳廿二 五丁
興治産靈神の御事小就て注るを合せ曉る可し八小
弘差无ハ具醸したる血の唄小聚れハ神氣以小寓り
て具主宰とふら由ふり右三百丁小住せる甫唄羅の
考(次ふる) 事小思合た可し九小報乃解乃泥嚮檄出釀セと云ハ茅
十二經小注

三章火條小甫解乃暮世五と有り第四章水條小係乃
解仁訶懷裳世天雨乃岐能暮世と有る右等の火氣の出
口ふりと云事ふり 其火氣と云物の体ハ血液を云ハ
末管液ふりし中焦液右出下血小至り上焦
小舟小看下の筋脈小渡り大絡小聚り心包絡小入
り筋小住ぎて赤けと成り心小藏其十二經
小往き筋小復りて往來究り無き物ふら其其血液ハ
心藏を其本処と為る由を明し其其時ハ其理著
明りふ其傳廿二卷四十四丁其注る如く人
の支体の物小觸て知覺の用を為す其謂ゆる火氣ハ
一身小弥論るケ故ふら人若寒氣小犯さる時ハ火
氣具為小塵るハ時ハ龜手と成りし知覺の用を成
す事能ハズ以て火ハ物其神たる事を知り可く
神ハ又其火を宅と為る事をも曉る可きなり然ハ心
以小奈詔異袁弘差无と有る所輕く見過す可き小非
ズ不

○日本書紀傳二十九

○三百二十五

阿剌天。不多^二阿仁佐^裂今^別味^別訶連天。伊^色梭訶^棒婆久^里路^吹可^形
太知奈免^内天^内行^内知伊乎於^二甫布^穴阿奈安^有剌天^保俱^羅瑪^闍
囊^副末^多故^万計^濃阿奈於^甫致^骨壹^囊仁^奴計^太剌^有
有^三枳^肝阿^和名^抄小^肝和^名有^三是^小て^気の^聚會
中^三謂^と聞^也然^るハ^以藏^小属^る膽^ハ先^の多^と聞^由
る^を常^小ハ^肝膽^を共^小伎^毛と^訓を^以て^知べ^古
事^記明^宮段^歌小^岐毛^年加^布許^と哀^陀迦^迦之^有ハ^万
葉^二十九^小肝^向心^乎痛^九一^三十^小肝^向心^摧而^之有^ハ
心^と云^む發^語ふ^ら其^ハ以^大小^阿奈^安剌^天保^俱羅
瑪^闍囊^副と^見元^次章^膽條^小訶^多岐^良懷^補致^囉仁^都

多^比云^と有^ハ如^く小^て肝^と膽^とハ^殊小^心小^親
さ^藏あ^らが^故小^肝向^心と^續け^たら^ふり^又万^葉一^ハ
小^村肝^乃心^乎痛^見四^十小^村肝^之於^摧而^十三^十小^村
村^肝心^不欲^十六^十三^小村^肝乃^心碎^而之^有ハ^同ト^ク
心^と云^む發^語ふ^ら右^小注^る如^く肝^と膽^とハ^心小^心
群^ガ著^る美^を以^て云^ふり^けり^又雄^略天^皇二^十三^年
御^記小^心府^を許^し呂^岐毛^と訓^ちも^心と^肝膽^を合
せ^云ふ^小て^大和^物語^小心^肝を^惑し^て求^る小^更小^得
見^出ず^又誦^経を^為る^を見^る小^心ハ^肝ハ^無く^悲
き^事物^小似^す云^ふ源^氏桐^壺十一^小実^小得^堪ト^ト

△和名抄大南郡
 名ノ野屬縣と有
 上件ノ村郡を
 のかく解りて看
 心言の言ふもと
 の岐毛豆岐小指香
 りも着けれは
 の事カ考及可

哭給ふ参りてハ甚心苦一ハ心肝ハ尽るハ
 じとあど有り心小愁若^若有る時ハ肝膽の陽気ハ共小
 尽る由ある可一若て舒明天皇前記ハ汝肝種而勿^勿誼
 言^言必^必巨^巨從^從群^群言^言云^云汝^汝虽^虽肝^肝種^種慎^慎以^以言^言云^云と有る肝種
 心推^推き^き矣^矣ハ^ハ万^万万^万二^二三^三十^十小^小真^真采^采桂^桂太^太心^心者^者有^有之^之香
 行^行と有^有る太^太心^心ハ太^太膽^膽と云^云小^小通^通ハ^ハ肝^肝種^種の^の反^反ふ^ふ者^者
 然^然れ^れハ心^心の^の火^火と肝^肝膽^膽の^の氣^氣と相^相合^合て^て其^其精^精神^神の^の太
 くも^も逞^逞くも^も雄^雄くも^も小^小勇^勇くも^も成^成る^る者^者あり
 記^記傳^傳卅^卅六^六卷^卷岐^岐毛^毛年^年如^如布^布の^の下
 肝^肝の^の類^類を^を上^上代^代小^小凡^凡て^て伎^伎毛^毛と云^云一^一あり^{あり}各^各別^別小^小名^名有^有
 ハ後^後小^小漢^漢籍^籍の^の五^五臟^臟六^六腑^腑の^の名^名の^の字^字小^小就^就て^て設^設け^けたる^る者

あり今ハ鳥獸ふどの腹内ハ在るハ凡て伎毛と云り
 云^云と云^云北^北又^又肝^肝ハ人^人小^小何^何ハ有^有る物^物ふ^ふを^を指^指を
 人^人の^の腹^腹内^内ハ^ハ猪^猪ハ^ハ屠^屠り^りて^て腹^腹内^内を^を見^見る^る事^事有^有る故^故ハ
 然^然る^る説^説ハ^ハ彼^彼解^解体^体ふ^ふと云^云事^事ハ^ハ我^我ガ^ガ古^古ハ^ハ絶^絶て^て有^有下^下
 膚^膚断^断と云^云て^て国^国津^津罪^罪ハ^ハ芽^芽一^一小^小禁^禁め^めく^くハ^ハた^たる^る者^者ふ^ふれ^れハ
 事^事ハ^ハ外^外戒^戒ハ^ハて^ての^の事^事ふ^ふれ^れハ^ハ我^我ガ^ガ古^古ハ^ハ絶^絶て^て有^有下^下
 天下^{天下}万^万世^世ハ^ハ其^其方^方法^法を^を定^定め^め傳^傳へ^へと^と其^其街^街在^在一^一坐^坐り^りて
 二^二柱^柱神^神の^の然^然る^る限^限ハ^ハ一^一事^事迄^迄ハ^ハ悉^悉小^小所^所知^知ず^ずと云^云ハ^ハ事
 ハ^ハ有^有る^る者^者ふ^ふハ^ハ且^且以^以大^大同^同類^類聚^聚方^方の^の如^如き^きハ^ハ其^其街^街言^言ハ^ハ出^出九
 一^一者^者ふ^ふハ^ハ各^各其^其名^名目^目を^を定^定め^め給^給ハ^ハず^ずハ^ハ倫^倫の^の世^世ハ^ハ在^在一^一初
 備^備ふ^ふ可^可き^き由^由無^無て^てふ^ふ予^予ハ^ハ心^心ハ^ハ人^人倫^倫の^の世^世ハ^ハ在^在一^一初
 云^云ハ^ハ遊^遊山^山窟^窟ハ^ハ心^心肝^肝の^の如^如き^きハ^ハ文^文選^選詩^詩ハ^ハ痛^痛矣^矣摧^摧心^心肝^肝と
 下^下官^官当^当見^見誤^誤詩^詩ハ^ハ心^心肝^肝俱^俱碎^碎と^と有^有て^て彼^彼土^土ハ^ハ云^云意^意味^味と^と又
 漢^漢書^書ハ^ハ慌^慌惚^惚を^を伎^伎毛^毛岐^岐延^延と^と訓^訓る^る是^是ハ^ハ有^有り^り又^又慌^慌惚^惚ハ^ハ作^作ル
 公^公を^を楊^楊氏^氏方^方言^言ハ^ハ神^神心^心慌^慌惚^惚と^と有^有り^り字^字書^書ハ^ハ失^失意^意貞^貞と^と注

○日本書紀傳二十九
 ○三百二十七

一 小年奈 倭 胸別 の意 俗 水落 云
 所是 云 万葉九 十 小胸別 之廣 吾妹 腰細 之 須輕娘
 子之 と有 胸 の 詞 きたる 美 人の 移 る 楚辭 小
ヒロキルネ 滂心 倭 態 妖麗 只 細 腰秀 致 云 と有 小依 て 仕 立 たり
 一 歌 ふ 同 言 万葉 八 小狭尾 牡鹿 乃 胸
 別 可 也 二十 小左 乎 之 加 能 年 奈 和 氣 由 可 年 安
 伎野 波 疑 波 良 續 後 撰 小朝 露 小移 る 小可 一 牡鹿 の
 胸 別 小為 る 秋 の 萩 原 之 詠 共 ハ 鹿 の 胸 を 以 て 草 葉
 を 別 行 く 小北 ハ 別 ふ 思 混 小可 く 右 件 肝
 小胸 上 之 云 小心 小 胸 乳 房 之 中 間 之 云 小胸 別

云 ハ 猶 胸 下 之 云 ケ 如 く 即 心 下 是 小 美
 岐 別 仁 何 天 ハ 水 穀 の 通 ふ 道 を 除 て 其 右 方 小 在 を
 云 ふ 三 小 不 多 仁 佐 吟 連 天 ハ 二 重 小 裂 別 れ た
 一 三 小 和 名 抄 小 朱 櫻 波 一 云 迹 波 佐 久 良
 又 本 具 部 小 棒 木 皮 名 可 以 為 炬 者 也 和 名 加 波 又 云 加
 仁 波 今 櫻 皮 有 之 と 見 え 万 葉 六 八 櫻 皮 纏 作 流 舟
 一 詠 古今 集 物 名 小 迦 尔 波 櫻 之 有 漁 氏 物 語 小 下
 小 加 婆 櫻 之 云 是 ふ 一 以 等 を 合 せ 思 ふ 小 以 木 の
 本 名 八 波 之 迦 小 一 迦 尔 婆 ハ 皮 名 小 下 有 る 是 小

今 第 五 章 勝 條 小
 頭 吳 新 波 勝 條 乃
 未 陀 別 加 太 云 見
 え に れ ハ 其 左 方 の
 胸 を 以 て 右 方 の
 一 カ 一 云 小 在 小 右 方
 乃 リ
 △ 野 分 四 小 春 の
 曙 の 雨 殿 の 間 小
 面 白 子 迦 波 櫻 の
 咲 乱 れ た 乃 を 見
 る 心 ち す 乃 を 見
 細 流 小 薄 紅 櫻
 の 花 乃 可 一
 古 今 小 云 乃 迦 尔
 波 櫻 の 事 乃 一
 七 注 せ り

出雲風土記
 神門部滑杖御
 須佐能袁命御
 子加加須世理地
 賣命生之小神
 所造天下大神
 命尊而通聖時
 彼社之前有磐
 石其上甚滑也
 即詔滑磐石哉
 詔故云而佐之
 滑ううう謂
 あり

して深色小樺茶又ハ樺色と有る是なり然るも樺黒
 と云時ハ其樺色の黒して濃と云なり五小可太知奈
 免天下卷 小鞍舞乐希雉呼哩咳云々有る如く神氣有る共滑ううう形と云云万葉一十九小常滑 能
 事無九十一小入出見河乃赤奈馬尔十一小常滑
 乃恐道曾不有ハ苔と云ハ茵小滑草と云ハ虫由
 蛭と云ハ亦右小同一五小汗知伊乎於南布内小膽
 を覆ふと云事あり肺の心を覆ふが如く其ハ膽を包む不
 り次章膽條小夷者記門乃 楚止裳珥在阿剌天と有る
 見ルハ以汗知と云ハ即奥方内を云うなりけう六小阿
 奈安剌天有保俱羅珥傳剌囊副ハ右小謂ゆる心肝と一小

云ハ又ハ村肝之心と云ハ或ハ肝向心と云事ハ所以
 是なり七小末多故萬計又濃安奈於南久ハ故萬計ハ細
 なる事ハ第十韋腸條ハ保楚良と有るハ柄微
 少しく密なる由なるハ血液なりてハ無く唯氣の
 腎小傳不穴共なる故ハ有へりハ小曾登背裳仁
 奴計太剌ハ其穴ハ前面有ハ無く後背背小貫たりと
 云事ハ第十七章腎條ハ可上民者記所 文仁伽波世友剌
 多布と有ハ以穴小路を免めて通ふなり有ける故以
 曾登背裳ハ次章膽條ハ七楚止裳と有て以ハ彼成務天
 皇五年御紀ハ山陽曰陰面山陰背面と有る是ハ後

世の歌詞小多在る外面イヘの美ありとハ異あり思混ぶ
 可うらぶ以ハ人の前面を南表ミナして後背を背面と
 云成るに給へる者小あむ猶又肝と膽とハ相倚れぬ
 事多一故次章小注セテ事共を以小相直して考合す
 可き者あり具ハ上三百五下小引る金匱要略の本文
 実肝と有る肝ハ夫治未病者見肝之病知肝傳脾当先
 を成せるあり斯れハ膽ハ肝の属あり事著一所以小
 肝を以膽を以共ハ枝毛と云る古言の例ふれど小肝
 を指して伊ハ割ハびるなり歌小花題ハ櫻ハ詠ハ可ハ
 といふ櫻題ハ花ハと云るハ○第十三章ハ云く夷者記門乃
 楚正裳ハ何阿ハ天伊善阿遠久訶多知保ハ儀ハ別乃吳得九
 島知仁記婆美伊呂乃迹絨利之累字太久波比訶多波

良濃補ハ玫囉仁都多比志ハ裳波武良土仁通多婦と見え
 たる夷ハ和名抄小膽中黄子云膽ハ和名為中精之府と
 有る是あり猶又膽をハ枝毛と訓る事止章肝餘ハ就
 己小注ハガ如ハ和割ハ祭小膽を伊ハ割ハむル気ハ美
 あり可ハレハと云るハ然ハ言ハつて物ハ怒ハと云ハ気止ハ
 謂ハゆハ肝火の亢ハふるあり勇ハと云ハ気進ハつて肝太
 くと退ハろハぬ謂ハあるふとを合ハせ思ハふハ心ハ火気
 を藏ハむる中ハ小專火の方を主として肝と膽とハ右ハ
 火気ハの気ハを承ハる官ありと以て肝ハ気聚ハり美あり可
 く膽ハ気ハあり可ハく思ハふるとあり故以膽ハ一ハ陽ハ

今建膳心大祿余と
云有は字の如く難と
心と並べて其武勇
を祿たる可く

り温ふり若^苦あり瞬の中焦^の陰あり寒あり甘あり
小相對ふ事あるが陽気の盛るる人の膽汁多く陰気
の盛るる人お焦液多うる者あり以て人の志
の大なるを俗小太^{タウタシ}膽と云る^{膽太云事}彼肝^イ種^ニの反ふるあり
故和名抄郡名小陸奥田膽澤^{伊伍}と有る人体小因れ
る事ふざれども例り好字を著るる御定ありけ
此小^{ヒコノモ}人^カ膽^カの多^カありを美祿る小象りて膽澤^{イサカ}とハ書れ
たりけり少して上章小注せる彼肝属の例小同ト様不
万^{ミレバ}字^カ格^カあり又人名小天孫本紀小物部膽昨宿祿と
云有る膽昨ハ膽疑めて坂小亦膽太き謂るる可く又

其子の五十琴宿祿ハ膽心利あり可き事右侍り人
ハ物部氏ありて天皇の御楯と有る人トふれば其心
して考ふ可くふむ又欽明天皇三十年御紀小膽津と
云入有る津ハ謂ゆる津液の事ありければ膽汁を以
て名と為るふしあり^{靈柩}小勇士者其所大以堅膽滿以
^儼と有る也合也考ふ可く大膽と
云い膽略と云ふと皆胆小依て云者あり右小中
精之府と云ふ又白虎通小膽肝之腑也と有るが小
考及ぶず可き一ハ記^肝門乃楚^背止裳^背何^背剥^背天ハ膽ハ所
の背面小在とあり上章肝條小汗^汗知^汗子^汗於^汗甫^汗布と有
る汗知ハ内裡の事あり即背面あり事右小注るが
加一^加二小伊^伊魯^魯阿^阿遠^遠久ハ色青くあり三小訶^訶多^多知^知保^保仗^仗

△中卷奈訶乃味座
儲小紀言者高奈吉
喜時天須見之猶
味言ハ

別涅乃吳得九如保久利涅を輔仁本小ハ保久利禰と
作り即和名抄小陰囊俗云布久利と有る以小似たりと
り四小禹知仁記際美伊呂乃内禹知仁ハ次如乃太言久
波比况小係れり記際年如名抄小黃疸を咬は無夜黃比と云ハ乃葉八二丁小秋山爾黃反木
葉乃又一丁吾屋戸爾黃變蝦手四丁小足日本乃山
之將黃變又五丁足引乃山佐奈葛黃變及十三十三丁小
付者丹之穂爾黃色ふと有る但右の黃變ハ母美豆と
も訓べもふれども具小黃比乃江小移者ふれが美
小違ふ所無一五小逆我利之累ハ謂ゆ。膽汁あり中
卷奈訶乃味座小伊者典太利仁我都波喜寸と有る仁

△以膽為名也と有る
説の如くして膽の苦
汁あり事と明せら
る者あり

我是あり欽明天皇二十三年御紀ハ 瀝膽抽腸
と有る瀝膽を伊衰斯多年と訓る七膽即汁あり故子
本草和名ハ瀝膽 一名トカ加奈と有る陶隱居ハ本草注ハ瀝膽味甚苦ハ
り六小太言久波比ハ輔仁本比を反小作れり仁徳天皇
七年御紀小家有餘儲宣化天皇元年御紀小收藏穀稼
蓄積儲糧マクハツミナリと見え乃葉十九二十丁小美久之宣九丁爾多久波
比於伎氏と有る是ハ蓄又ハ儲又ハ貯字の美あり
猪塚膽中小苦汁を蓄收むるハ瞬ハ中魚液と幽門小
合ハ以て胃中小注ぎ飲食の物を釀成一血液を造る精
あり事上小條ハ注ハカ如ハ七小訶多波良傍濃補玖
囉仁都多比ハ訶多波良ハ傍ハあり上章肝條小肝ハ胸

別の右小在りと言ひ以小膽ハ肝の背面小在りと言
 れバ腹の全体小て心ハ中央小在り肝膽ハ其右小
 在を以ハ 膽を主として云故小心を傍側と云云
 あり猪肝ハ何奈安剝天保俱羅珥副と云以以
 小補玖囉仁都多比と有肝膽共小心小傳ふと云
 事ハ心ハ肝膽の氣を得て盛小成り肝膽の二ハ心の
 火を得て盛小成不妙理有カ故ありハ小志裳波武良
 土仁通多婦ハ腎ハ水を主とする官あり膽汁ハ伊ハ氣
 あり火小縁て起り汁の水ハ 腎（腎）起りて以小一
 種の物と成れと謂ふ通（以事下三三四ハ） 所以小傍火小傳以下

小腎小傳ふ小有り難經四難小心肺天地呼而出
 凝固肝主收斂心肺主流動由之亦可知其然而引内腎主
 根在膽陽膽生陽中焦生營液遂入于肝為流動物云
 夫水穀者因咽委胃容小腸而膽汁魚液消冠化熟以
 釀造精微溫時之營液と有ハ更ふり上ハ引る全價
 要略ハ松原氏注ハ按人補瀆先天之生命而保天年者
 穀氣之養也制熟水穀所以成氣血者胃也助胃之寒溫
 得其所者胆汁共中焦液也以章言脾胃也助胃之寒溫
 兼胆也夫胆汁者苦而溫中焦液者甘酸而寒也相共注
 入肝門製化穀氣釀造營液為氣血之原寒溫得其中也
 經云十一藏取決於膽由之觀之則血氣之所行藏府百
 骸之寒熱勝復莫非皆胆共中焦之過不及○第十四章
 云いこと云る共を考巨して其意を得べし
 小云く伊日婦具者餘古志濃者多及奈可仁何利天
 太致蒙太比乃吳壹九倚路旨呂支天有知仁濃美九日
 乃毛乃衰乎差免訶毛反天志毛久袒和多仁謝多婦乎

美南者。知之流奈須末太波陀仁新陀隣天美豆惠波伊
婆利奈流成と有る伊日婦冒久ハ飯囊イヒナク云云云及下即冒藏
の事あり然る小和名抄小冒中黄子云冒和名久曾和
太布久呂
為五穀之府と有る事不れザル久曾和太布久呂云
ハ賜の事ハ別あり以下又ハ志下毛久袒賜和多名仁傳多
婦と有る冒下ハ送致す所有不謂ハ其ハ決めて賜
ふしてハ叶ハざる事あり下和名抄ハ大賜中黄子云
大賜和名波
良和太為傳送之府又小賜中黄子云小賜和名保
曾和太
為受盛之府と有る以二ハ賜ふハ當ハ此ハを
ハ其と定む可き事あり有ける其ハ字鏡集ハ暗字を

久曾和多ハ久曾夫久呂ハ亦波良和多名ハ訓て
賜と暗と字音ハ相近ウリけれハ然る訓と有るハ
ハ全ク和名抄の冒の和名ハ決めて誤れハ事著明也
者ありハ諸以伊日婦具の伊日ハ飯ハ事傳十
四五ハ小己ハ注セるハ如ハ婦具ハ囊ハふハ呂ハ
略ハハハ小形ハ云ハ小魔ハの如ハと有ハ即囊口ハ
関きたる状あり是あり和名抄行旅具ハ囊蔣勤切額
云ハ字亦作ハ和名抄又勝ハ和名於ハ比囊之可帶也ハ有
是ハ象ハりて号ハれたりハ首ハあり可ハハ
利と有る袋ハ不ハ由ハ不ハ又胃ハを久曾和太布久呂ハ云
ハ辰賜袋ハ美ハあり勝腕和名由波利ハ不ハ久呂ハと有ハハ辰

腎の氣ありて腎 一小餘古志腎 濃旨下 後反ハ腎之下方腎 不
皆同ト急あり 一腎 如蜈蚣腎の下方腎 不在物ありけルハ先腎を先小
胃を後小為べきを蜈蚣前後の違へる小似たるハ故有
る事あり然るハ胃ハ飲食を藏する府あり故小己
小其事有れば蜈蚣先落著て儲後小腎の腎
ハ故小位を以て云へハ腎胃ありて虽も養を以て
云時ハ胃の方先小して腎の功を成すハ後ありを以
て蜈蚣ハ錯置されたる者ところ思ハされ二小
奈可仁阿利天ハ中央小在とあり次章腎條小豫吳新腎
波波囉乃非陀刹加太伊日婦吳乃烏反仁阿李互と有

ハ腎の所在ハ一ハ腹の左方小在て 肝小相對
へるハ肝ハ膽を覆ひて右方小在を胃ハ腎小著たる
物あり小其位ハ中央小在とあり漢家ハ胃を在
右と云ハ蘭醫ハ蜈蚣を在左と云ハ支解したる死屍
を以て定めたる者ありて眞實小違へるを蜈蚣ハ中
央小在と傳へて給へるあり生活たる身を以て徹
視し給へる神の御言の著明くして今も水を飲み湯
を用ひて試す小眞直小下著ずと云時無きあり現の
証據小ハ有けり蜈蚣一事を以て小人智ハ測有る者小
て我健く賢しげ小云と虽も内経家の説も未ださ

万所多きを知べし二小蒙太比乃吳堂久如和名抄小
 魔揚雄方言云自閑而東覺謂之魔亦作瓮字亦作有
 是なり三小倚路音呂支天ハリ支ハ美久草体一
 誤れるハ非ト、亦之黒を白ミふと常ハ云事ふれ
 ハ音呂ス天又音呂美 天ハ云べし音呂支天
 云ハ例小蔓へり四小有知仁儂美九日乃毛乃表ハ茅
 三章火條小謂やハ水味美豆同倍の是なり 茅四章水條小
 美豆波能氏己日乃安治万計奈剝久智典剝奈可味太
 仁伊剝万自陪と有る奈可味太即母胃ある事己ハ上
 二百九 小注ルカ如ハ五小字差免河毛及天の字差免
 十九丁

の三字輔仁本ハ無きハ脱たるふり其ハ茅四章水條
 小伊剝萬自陪と有る小当り次小訶母及ハ茅三章火條
 小奈伽和多仁保乃岐波故比互美豆何治字訶母及茅
 四章水條小奈可味太仁伊剝萬自陪保乃解仁訶母世
 天と見え次章 解條小預吳訶波云々本濃計字太仗
 波比伊比不具半保乃記天訶門及雖殘ふと有る如
 く胃ハ飯囊ハ口入り入る物ハ悉ハ小藏ヤリて
 釀成ハ其ハ腸小達して其精微ハ眞なる物ハ管衛
 と成り渣滓ハ下小傳送る事ふて其状酒ふと釀セ
 るハ相等しくふむ有れば訶母及ハ常小云ふり

△中巻奈詞乃味座
橋小元自止波美豆
新々利候見え

醸の事ハ傳十三百三小委ト注セを見へ十六小
志下毛久祖和賜多仁傳嗣多婦ハ以事第十七章賜條少説
べし七小字美南者知之流奈須の流を輔仁本小室
有ハ誤ハて乳汁の事ハなり古事記八十神段波小母乳
汁と見え和名抄小乳知和名母所以飲子之汁也と所見
たれハ乳汁と云事古言ふハ小末太波層陀仁新陀隣
天△下巻の肌膚小滴須瀝能ふハ以言ハ八洲起元章小所見て即
傳六四二十小位ヲを新陀隣と云例ハ垂櫻垂柳ト有
て共小下垂の美水ふ九小美豆惠波伊婆尿利奈流ハ輔
仁本小惠波の二字無一諸此ハ謂ハる経水の事ハる

△中巻味座乃海詞知
傳智乃味座乃中ハ
美波利ト云

可き小就て考ハ小惠波の惠ハ乾咆を惠豆岐エ醜エ浮を
惠古哉と云ハ味ハ醜味エと云ふハの惠エ小彫醜エの美
江ハ聞ゆれハ水醜尿エと云事ハて 肌膚小垂トる経水
を水取ト成シて醜エ出ス謂ハるハふハけハ古事記日代
宮段小月経ト有ルを倭建命の都月記多ク知迹祁理と詠テ
給ハ美夜受比賣メ答奉りて都月記多ク那牟余ト歌へ
ろ小依テ都記誌母能ト訓ベ今ハ月ノ物ト
と云ハ月ノ小定リて有ル物ノ謂ハ是ハふハとハ蛭ト正
しき名ハハ非ズ然ルを延徒本小月経ヲ都記ト訓ル
名抄小月水浴云佐波利空穂後蔭卷小何時ト街
穢ハ止給ハ云ハ源氏浮舟卷小夜ト穢レさセ

下三百七十一
云々

給ひて云々細流小月障り出末ぬらと云成りたる
ふりて注し凡雅集神祇の本より塵小交り神
北月の障り何々苦しき以和泉式部能野下詣た
りけり小障有奉幣叶ハさうりり小晴やぬ身
浮雲の柳引て月の障り成り悲しきと詠て寐たり
る夜夢の告させ給ひりりさむる有れり障
と云小楸と云小月水の出り事云云稱ありて
正しく其物を指て云り非ハ故今ハ姑く佐波理
能母能と訓つと云れりハ実ハ然ハ事ハ月之物
と云小
任藤別と云ふ正しく其物を指す稱ハ有れり
常ハ大いり小月之物又ハ月之障り又ハ楸と
云古言ハ
状ありけり
○芽十五章云く禊
新波波囉乃非陀
利加太伊日婦具乃鳥反仁何李互訶太智多奈五乃故
壹九伊呂記里乃波奈乃吳登九本濃計平太依波比伊
比不具半保乃記天訶門及離須ハ預吳新ハ和名拔心

△又新撰字鏡
鏡懸麗觀如如如如
及爾上世見之
又爾上世見之
又爾上世見之

脛 和名典 土之精也色黃と有ハ字鏡集ハ脛を典波
古志と云又典古志と云有典古志ハ下小訶太智
奈五乃故壹九と云即形如掌と云事ハ横肉と
云美ありびを今一ハ未思得ず一ハ波囉乃非陀利加
太ハ腹左方あり第十二章肝脛ハ振開波年奈孫ハ乃
美岐利仁阿利天と有ハ如ハ肝ハ胸別の右方小在ハ
ハ灰一 下方の左小並へるあり二小伊日婦具乃
鳥反仁何李互ハ上章胃脛ハ伊日婦具者餘古志濃旨
修反奈可仁何利天と有ハ如ハ腹の中央小在ハ胃
の上方小横たつりて左方小在ハ由あり三小訶太智

○日本書紀傳二十九

○三百三十八

多奈五乃故登久如の五ハ輔仁本吾字小作レリ諸多
 奈五ハ中卷伊太見可多條小多那許古漏と有と一ハ
 て和名抄小掌四声字苑云掌和名太奈古手心也
一云太奈曾古
 と有る是ふる心コを切レ唯小許と云事上三百二
 注せるが如色小伊呂記桐里乃波奈乃吳登九ハ和名
 抄小梧桐陶隱居本草注云柯有四種青柯梧桐齒柯椅
 柯和名昏梧桐色白有子者今按俗記呼椅柯者白柯也
木里
 三月花紫赤堪作琴瑟者是也と有る是ふるが以紫ハ
 薄紫を云ふ彼小野の色を黄ありと云ハ支解する時
 ハ色の黄小愛れとを真と心得たり者おしめり五ハ本

濃計氣半太著波比ハ火氣を蓄儲ふり中卷奈訶乃味座
 條小餘肝吳志者保差火具利預と有る以てハ以肝小
 ハ專火を蓄儲ふるを其火氣ハ如何あり由る
 也稽ふる小胃中の飲食を醸す火ハ心より直ハ兼
 下して肝心傳わりて其活機を成せり肝と胃と
 の中間ハ在不幽門と云り肝ハ膽汁と肝の中焦
 液とヤ合ふ時ハ二ハ陽の苦汁あり一ハ陰の甘酸
 汁ありと雖も其ハ具體ハ水なる故ハ肝ハ火氣を導
 ざれば流注ハ事能ハズ以て肝ハ火氣を蓄ハハ
 置天常ハ其用を利するなりけり六ハ小伊比不具字保火

乃記天訶門廣及雖成須云保乃記天火氣尔氏云
 下云尔云略云け云り云て云胃云小云納云不云飲云食云の云物云を云胃云小云蓄云儲云
 たり云火云氣云の云し云釀云し云成云す云と云事云ふ云り云其云事云件云六云右云の云第云
 七云條云小云注云せ云る云が云如云し云諸云以云小云胃云と云云云少云次云芽云を云以云て云
 五云章云小云在云べ云き云事云ふ云れ云ど云小云胃云の云先云水云味云の云落云著云く云府云不云
 り云其云事云有云て云後云小云胃云の云以云て云製云化云し云る云事云ふ云る云故云小云
 胃云を云先云小云一云胃云を云後云小云為云る云者云あり云○第云十云六云章云の云云云く云務云權云登云波云菴云奈云甫云
 稔云乃云咏云記云美云支云利云非云段云利云尔云曾云比云天云都云囉云味云乃云五云十云九云何云
 世云依云伊云路云依云鳥云知云尔云保云梵云黑云乃云鳥云麗云何云哪云安云剎云元云保云豆云祿云
 半云年云須云比云何云都云天云可云民云者云紀云剛云仁云加云波云世云剛云多云布云と云有云る云
 務云權云登云の云字云鏡云小云腎云視云忍云反云上云と云見云之云和云名云抄云小云腎云白云虎云

十四
字取

通云腎云和云名云無云水云之云精云也云色云黑云と云有云る云是云ふ云り云名云美云の云下云
 小云保云豆云祿云半云年云須云比云何云都云天云可云民云者云紀云剛云仁云加云波云世云剛云多云布云と云有云る云
 る云ふ云り云け云り云一云小云菴云奈云甫云稔云乃云鳥云麗云何云哪云安云剎云元云保云豆云祿云
 加云世云奈云甫云也云と云有云る云言云ハ云背云中云の云美云ふ云り云双云小云菴云奈云甫云と云云云
 不云奈云ハ云創云の云之云の云轉云つ云と云思云ハ云し云り云と云小云體云天云皇云元云
 年云脚云記云小云中云双云云云那云と云見云え云停云中云倉云停云中云魚云ふ云と云皆云那云不云
 れ云ハ云背云中云背云の云美云ふ云る云事云云云小云更云ふ云り云二云小云美云支云利云非云段云
 利云尔云曾云比云天云の云背云骨云と云中云央云し云り云と云左云右云の云相云副云ふ云美云ふ云
 り云三云小云都云囉云味云乃云五云十云九云其云左云右云の云相云副云ハ云添云に云る云を云
 形容云れ云る云ふ云り云和云名云抄云小云紫云菴云本云草云云云紫云菴云和云名云衣云比云文云

○日根書記備三十九

○三百四十

△保豆檢乃於登路
弊者任豆檢乃及詞
致入楚知波志理知以
保豆と見え又

漢語抄云葡萄衣と有る以葡萄
の如しとふ可し比加豆良乃美
世延伊呂入延と有り備以心汗阿延色阿延傳中三百三十一卷一くを云ふに以此
ハ阿由流と活きて出字の美ふふ又汗阿由流云々有り
阿延が成ぬ乳母と云ハ佳吉物語小足聖德太子の血と判阿夜一琴の名を書者
り古事談小血阿由と有ると血ハ小行ハ乳ハ其
出る事を阿由流と云る是あり着て中卷奈訶乃味座
條小无良止波美豆新太利須と有る保也考ふふハ阿
世ハ水云て伊路ハ血と云るけり五ハ鳥知尔保
楚黑乃鳥都阿哪安剥元ハ茅十章肺條小汗知仁保楚

良乃禹豆阿里天と有る同ト上三百十 見べ一六ハ保
豆標半と有る以ハ精液と云ふり以ハ上三百 第五
菴豆條小注ハ如く男女交合り時ハ天津靈を合
て相結ハる始と茅二章小保豆標奈理と有る以ハ先
天の元ハツホ 眞ふり具茅五章ふハ菴豆波致音神乃須俱
剥有漏記辛愛羅美須才免互保念乃汗知耳伊剥祢萬
之昔呂眞貞須年登高剥奈訶倭多仁伊剥天保豆祢止
奈裏と有ハ後天の養ハ資て右の保豆祢を醸造事
ふハ其始胎體ハ在るハ須年と云ハ其餘剝此ハ
賢腎小入て精液と云由ハ共ハ同物の異名あり七ハ

○日本書紀傳二十九
○三百四十一

公故上九條何奈條
小條楚滅保頭乃毛
 委身之有以男女交合
 の精液先^結爲^結爲^結
 して一^結を成^結す所以か
 らんを以て己^結成^結れり
 小^結以て^結一^結條^結を由
 なる腎と表^結裡^結相
 對へる故か^結下^結と^結表^結
 伊^結波^結世^結命^結保^結保^結須^結
 神^結才^結數^結證^結三^結有^結
 七^結以^結世^結と^結取^結り^結
 精^結液^結も^結出^結る^結由^結な^結
 今^結も^結腎^結の^結力^結も^結
 種子^結の^結事^結を^結明^結し^結べ

牟^結須^結比^結阿^結都^結元^結の^結結^結聚^結ふ^結り^結以^結保^結豆^結祿^結の^結腦^結髓^結も^結寓^結り^結て
 頭^結腦^結も^結入^結る^結者^結左^結右^結合^結せ^結て^結二^結十^結條^結有^結り^結脊^結髓^結も^結入^結る^結者
 左^結右^結合^結せ^結て^結六^結十^結條^結有^結り^結以^結八^結十^結髓^結を^結一^結身^結の^結内^結も^結打^結延^結
 て^結八^結十^結結^結の^結結^結下^結れ^結る^結其^結の^結あ^結ら^結ば^結腎^結も^結り^結け^結れ^結ば^結恋
 小^結以^結不^結結^結り^結聚^結ち^結う^結て^結精^結液^結の^結府^結も^結成^結り^結男^結女^結交^結合^結の^結
 時^結か^結互^結小^結以^結精^結液^結を^結結^結聚^結り^結て^結子^結を^結生^結む^結事^結も^結故^結不^結
 夫^結地^結の^結開^結闢^結し^結て^結傳^結り^結て^結子^結孫^結の^結八^結十^結連^結孫^結も^結至^結る^結
 迄^結小^結終^結古^結小^結易^結の^結事^結無^結く^結窮^結り^結無^結き^結る^結して世に共におこる者是^結ふ^結り^結ゆ^結れ
 ば^結甚^結に^結二^結靈^結一^結く^結奇^結一^結く^結妙^結なる^結神^結物^結も^結あ^結ら^結ば^結有^結り^結る^結
 八^結小^結可^結氏^結者^結紀^結文^結仁^結伊^結波^結世^結蘭^結多^結布^結と^結有^結り^結第^結十^結三^結章^結膽^結

條^結小^結志^結裳^結波^結武^結良^結上^結仁^結通^結多^結婦^結と^結有^結り^結是^結ふ^結り^結が^結其^結第^結十
 二^結章^結肝^結條^結の^結所^結見^結ざ^結る^結ハ^結上^結三百^結二^結小^結注^結せ^結る^結が^結如^結く^結肝
 膽^結の^結二^結ハ^結共^結小^結相^結膚^結れ^結ず^結一^結て^結傍^結ふ^結り^結心^結小^結傳^結ふ^結由^結ふ^結れ
 ば^結以^結肝^結膽^結共^結小^結下^結ふ^結り^結腎^結小^結通^結ふ^結可^結き^結事^結論^結を^結待^結ず^結一
 て^結明^結る^結も^結あ^結り^結以^結波^結世^結の^結第^結二^結章^結小^結美^結豆^結保^結乃^結計^結乃^結不^結多^結
水火通^結ず^結加^結波^結世^結と^結有^結り^結水^結火^結の^結相^結交^結る^結を^結云^結ふ^結れ^結ば^結以^結肝
 膽^結の^結陽^結氣^結と^結腎^結の^結陰^結氣^結と^結相^結交^結り^結て^結互^結小^結輔^結相^結する^結事^結も^結以^結
 肝^結膽^結の^結腎^結の^結力^結を^結得^結て^結盛^結不^結腎^結の^結肝^結膽^結の^結勢^結も^結依^結て^結強^結く
 ろ^結り^結事^結と^結所^結見^結た^結り^結諸人の呼吸の事有るは曉^結り^結見^結
 經^結小^結腎^結小^結藏^結也^結又^結其^結呼^結氣^結の^結内^結小^結入^結る^結ハ^結肺^結心^結肝^結胆^結を^結
 以^結肝^結胆^結心^結肝^結を^結傳^結い^結て^結出^結る^結を^結以^結て^結其^結近^結き^結事^結を^結思^結ふ

○日本書紀傳三十九

○三百四十二

可一脈理論之云物小抑入之木晚母胎以氣專以母腹
為本而偏從肩帶脈裏通其直自天象受者在分晚後其
生也作自口鼻入達於內見生隨地始發喘予者即其時
也所謂神氣者亦屬天故恒居心腎之間蓋人寐則舍於
腎腎則通於心是以其寤心形同視聽味之機莫不動
焉而心者之主宰也形同視聽味之機無所施
焉蓋以藏乎腎故也
○第十七章小云く呪僧俸太波
保助乃鳥波可太用梨志毛仁咏太滿俸仗美互伊路鞅社師魯仇布止利奈我志鳥知仁阿豆惠乎多反須穢
者久層响奈身都豆喜通太副裳濃奈剔登と有る呪僧
倭太ハ尿腸と云事乃上三百三小注セる如く和
名抄心胃中黄子云胃和名久曾和為五穀之府之有る
事乃れど小胃ハ以第十四章小第四章伊日婦區ハて

即飯囊の事乃れハ説文小胃穀 腑也之有ハ合る
尿之云ハ其胃中ハて穀食を釀送れる所乃れハ腸ハ
ハ以ハ乃れりハ字鏡集小睹字を久曾和多又久
曾夫久呂又波良和多と訓るハ睹腸同音青ありを以ふ
り然して和名抄小大腸中黄子云大腸和名波 為俸送
之府又小腸中黄子云小腸和名保 為受盛之府之有る
以大腸小腸を俸て共ハ以ハ吹僧倭太ハ云ハ
ウりウ若て以ハ彼良和太ハ云ハ騎ハ上下ハ直ウて
腹中ハ蟠ル謂ハ吹僧倭太ハ尿腸久曾夫久呂ハ
原囊ハ曾和太布久呂ハ尿腸囊ハ事云ハ更ハ乃下

文の九層呵奈ハ尿穴ハ云々云々ハ和名秋
小屎野王案真和名尿也説文云屎大便也ト有是
方ガ或説ハ大便臭之謂ト云レド其ハ末ハ疝ト同
言ナラケリ其ハ第十四章胃脘小伊日婦具者云ト有
知仁濃美九日乃毛乃袁半差免訶毛反天忠毛久祖和
多仁剛多婦ト有ガ如ク胃中小釀ト其精粹を造リ
腸小達ト大ハ疝ト腐ト尿穴小送出了事ト所見
ナリ以ハ妙ナ事有リ四神出生章第四一書ハ大
便化ガ神名曰垣山姫ト有ト古事記小波逆夜須昆賣
神ト有リ記傳五五ト有下小垣ハニヤス粘ハニヤスナリ字鏡小垣謂作泥物

也祿也須ト有リ略ト云レバト如ク其令ハ粘ハト云ハ物
を熟成コナト其質を易カト云レバ腐トハ別ナレドハ
其状小粘ハ腐ナリ粘ハ理小於ト同トけれハ大腸
小腸ハ飲食メ物を粘ハナリ尿ハ其腐ト謂ハ出
地ト言ナリケリ夏即次ハ云ハ阿豆惠ハ件考合了可
然レバ臭を久法久久佐志ト云ハ其腐ナリ物ト
薫来ハ状を以云言ナリ措其腐字ハ久多志久多須ト
活ク言ナリ俗ハ並テ久佐理久佐流ト云ハ古
言ナリ字鏡集小粘字を久須祿ト有ハ腐疝ハ如ク剛
ウハ方合了可ト又右ハ引ハ和名秋小大腸を傳
返之府ト云ハ小腸ト受盛之府ト云ハ小心を用ハ
可ハ事一ハ保鋤乃鳥波可太用ハ梨志ハ仁ハ疝の上
方ト下方向小ナリ其志ト云ハ不ト謂ハ丹田ハ

△折頂字鏡小略
也厚也ま白る留知
太る留る有り又

思ひて即下焦小当る所ふりける二小味太満徑似美
互ハ蟠組ふり字鏡集小盤字三割有る其始小和賀奴と有る即蟠字
の義ふり和陀加麻流ハ曲屈ワカムの字小其次小和陀麻
流と有る以て同トく略語ふりける又都豆良袁理と
も有る九折入ハ互折の字の意ふるを合せ考ふ可
又蟠マカを玉篇ハ龍蛇卧兒と注し又文選ハ蟠
蛭マカを訓り以美互ハ但合せ結成せる状を云ふり三小
伊路鞍イロ社師魯仇ハ浅白マシロして潔白ふりざるを云ふ四
小布正利奈我志ハ太長長して右小謂ゆる蟠組ハ許小
其丈の有を云ふり五小鳥知仁阿豆惠味末平多平反ハ其

腸ハ小尿と成り尿と成て出る物を混へたりとあり
諸奴阿豆惠味末の約あり以て輔仁本阿豆惠有る邊を略しあり
布布りけ其ハ上三百十小注せるガ如く茅九章
阿奈條味末小久楚安那者阿受隈字倚陀須出と有るハ中卷
阿都味末阿太條味末小正味末阿頭味末倭味末と有るハ共小約と略し
事事の異れること小言美味末ハ味末と云言ふあり
不然ハ茅一章何万保万計小都知美豆阿治字中奈和太仁伊連入
伊太須出と有る土水味ハ飲食の二を云事上二百小
注るガ如く又茅四章水條水小美豆波能民水日乃安味
治万計設奈剥中云ハと云ハ飲食の二を云るガ水水ハ本

△其の茅十二條の
河都御多味末
方こそ事多しと曰
身原苦み如き物を
も一や七承穴く出
ん物を引小巨族阿婆
傷こそと以て其
凡て小巨事を知
べきなり

より味無し外物を合せて味を致す事なる故小其想
てを云時ハ味のハ一ハて飲食ハ全を云ふハめり故其胃
中小納する飲食ハ本ハ種ハの気味を備へたハハ
具をハ味本ハ一ハて己ハ其ハ然ハ醸ハて腸ハ致ハ時ハ
各其気味の精粹ハる者ハハ勝ハ取て以ハり尿ハ尿
として別れ下る可き物のハ一ハ在ハ間ハを味末ハハ云ハ
りけり△六ハ多ハ反ハ即^{上三言ハ洋多知}温ハの氣ハハ茅四章水條ハ知
士甫^液登奈^成剝保^胃祿^造キ多止存ハ有ハ小等ハ一ハ満温ハるハ受
ふる事云ハ更ハるハが以ハ一ハハ心^所有ハ凡^ハ飲食ハの物
の胃中ハ入ハて胆^汁ハ之^ハ焦^液ハと^ハ爲^テ熟^成ハれ^ハ以^ハ小^於て

精微ハ一ハき^管液^ハを^醸造^ハり^具伴^ハ小^智ハる^ハ阿^寸惠^ハと^成ハ
て大腸ハ温ハ小腸ハて^控セ^ハて^下焦^ハ至^ハり^尿尿^ハ
引^ハハる^ハ管^液ハを^以り^蒸上^ハて^上焦^ハ送^ハり^肩下^ハ
絡^脈ハ小^和ハて^大給^ハ小^會ハり^心包^絡ハ入^リ肝^ハ注^ギて
大^ハ致^ス柔^レ赤^キと^成リ^心藏^ハ小^納リ^其ハ^経ハ^往
き^絡ハ復^リて^往来^ハ無^窮キ^者ハ^以て^職員^ハ令^鎮
魂^ハ解^ハ小^拓離^遊之^運魂^鎮身^体之^中府^ハと^云て^殊ハ^以
中^府ハ治^ハハる^ハ神^術有^ハ小^如以^ク性^余ノ^本ハ^有る^所ハ
る^ハを^以ハる^ハ七^ハ小^須織^者九^層阿^奈耳^都豆^喜通^太副^ハ
茅九章阿奈條ハ久^原楚^安那^者阿^受隈^手倚^陀復^ハと^有る



是ふるふり八小裳濃奈^者剃登^ての茅一亭^小於保奈^年知
 命乃美己止^中仁の結ふれバ下小能理多麻布^云言の
 有べきを以^小其意を持せて略られたり者^{あり}
 大己貴命の内径の所説あるが漢の^小蘭の^小自然の
 合ふ事^七有^一又合^{ざる}事^七有^一其合^{ざる}所の
 有^一彼の人を^支解^{したる}死^{たる}屍^の大^小趣^の異^{なる}者
 有^一若^くは^何て^の其^必し^得たり^と定^む可^き
 べ^くは^何れ^を以^て中^の其^違ふ^所有^を以^て面^白し^と為
 成^すべ^し所^思ひ^然る^ハ大^神の^生膚^断死^膚断^を
 の^初の^時在^し坐^て見^行ハ^大神^の有^べし^と為
 小^令生^出給^へり^天地^を相^造る^一給^ひ神^を人^を世
 ハ^させ^街在^し坐^{ける}己^小記^記小^謂ゆる^天地^間
 聞^の説^と一^事ハ^有け^む以^大神^の受^賜ハ^り傳^へ
 知^る所^在し^坐ける^街事^と見^ゆれ^バ人^智の^則り
 知る^所在^し坐^{ける}街^事と^見ゆ^れバ^人智^の則^り

Handwritten mark or signature in the bottom left corner of the left page.

